小学校社会科教育における歴史的思考力の涵養に向けて

―国語科教育との連携の可能性から探る―

*田　中　良　英・*堀　田　幸　義・**津　田　智　史

Toward the Cultivation of the Historical Thinking Mind in the Social Studies Education in the Elementary Schools: An Essay on the Possibility of Cooperation with the Japanese Teaching

TANAKA Yoshihide, HOTTA Yukiyoshi and TSUDA Satoshi

要　旨

近年、高等学校及び大学における「歴史離れ」が懸念されている状況に対し、本稿はその要因と対策とを探る前提として、小学生における歴史への関心の現状、それを取り巻く環境に関する実態調査を試みた。宮城県仙台市周辺の６つの小学校の４ ～ ６年生に関するアンケート調査においては、少なくとも小学生の段階では歴史への一定の興味・関心が捉えられ、必ずしも「歴史離れ」は明示的でないこと、こうした関心の要因としては授業よりも歴史漫画などそれ以外の素材の影響が強いことが明らかとなった。このような実状と連動して、出版業界においても歴史漫画シリーズの売れ行きが好調であることも判明したが、それらの作品には一面的・限定的な歴史理解に陥りかねない構造も潜在する。また歴史への関心を涵養する機会としては、社会科以外の授業の機会も注目されるが、本稿では、とりわけ同様にテキスト理解を根幹とする国語科との連携の可能性を探り、それが双方の学習にとっても相補的である点が確認された。

Key words：Elementary School（小学校）
Historical Thinking Mind（歴史的思考力）
Social Studies Education（社会科教育）
Japanese Teaching（国語科教育）

１．はじめに

2006年に高等学校におけるいわゆる「世界史未履修問題」が発覚して以降、歴史教育者のみならず、歴史研究者にも危機感が広がり、多くの文献や提言が公表されてきた。この問題は本来、高等学校で必修科目とされているはずの「世界史Ａ」あるいは「世界史Ｂ」が敬遠されている状況に基づくものであったが、それに留まらず、桃木（2009）以降、近年では日本史を含め、歴史教科全般に対する関心の低下、言わば「歴史離れ」を危惧する方向へと拡大している。実際、大学入試センターが公表する大学センター入試の各科目別受験者の割合は、「世界史」がセンター試験初年度の1990年度入試で28.1%、「日本史」が1995年度入試で36.9％と最高値を示した一方（ちなみに「世界史Ａ」と「世界史Ｂ」の分離後、そして「日本史Ａ」と「日本史Ｂ」の分離後は、初年度の1997年度入試が0.95％、21.1％、1.62％、32.5％で最高）、総じて減少傾向が見られる。直近の2019年度入試における本試験でも、受験者総数545,707人のうち、「世界史Ａ」受験者は1,346人（0.24％）、「世界史Ｂ」93,230人（17.1％）、「日本史Ａ」2,359人（0.43％）、「日本史Ｂ」169,613人（31.1％）で、

＊　社会科教育講座
＊＊　国語教育講座

大きな変化は生じなかった。

こうした「歴史離れ」と関連した現象と推測されるのが、歴史研究の分野において、専門研究者を目指し大学院に進学する学生の減少が生じている点である。歴史関連諸学会間の相互連絡・交流の促進を目的とする日本歴史学協会に設置された若手研究者問題検討委員会の作成資料によると、1990年代初頭に大学院拡充が開始されて以降、1992 ～ 2013年の20年間において、人文科学分野の大学院生の数が修士課程及び博士前期課程、そして博士後期課程ともに２倍以上に増加している一方で、史学については前者の入学者が73％、後者が69％に低下している。志願者数もそれぞれ51％、58％と減少しており、史学系の大学院の人気低下が顕著である[1]。このような状況が「若手研究者問題」、すなわち少子化や予算減を根拠とした大学教員のポスト数の減少、それに伴い、博士課程を修了して博士号を取得しても就職先が得られない、非常勤講師の機会さえも競争の対象となるといった近況を見越して、大学院進学が敬遠されていることによるのか、それとも上述のような関心面での「歴史離れ」によるのか、その主たる因果関係は定かでないが、恐らく双方ともに要因になっているものと思われる。これは、将来の専門研究者を育成する基盤の弱体化を意味するとともに、大学院志願者・入学者数の低下の結果、史学専攻の大学院における後任補充などが一層困難になることで、さらにポスト数の縮小を生む、言わば「負のスパイラル」につながる。

少なくとも大学入試以降における「歴史離れ」が鮮明である現状を受け、その対応策を検討する基礎資料として作成されたのが、大学教員５名と高等学校教員５名から成る高等学校歴史教育研究会が2014年６月末から８月末の２か月間に実施した「高等学校の歴史教育改革アンケート」である。高校教員391名（58％）、大学教員170名（25％）、高校を経ての大学教員61名（９％）、予備校講師・教科書編集者など「その他」52名（7.7％）、計681名の歴史教育・歴史研究関係者から得られた回答結果に対する同研究会の解説においては、「高校の歴史教育の現状（問５［現在の高校歴史教育が抱える問題点をどうお考えですか］）に関して、アンケートでは、大学入試への対応に追われていること（肯定が74.4％）、大学入試の影響で用語の暗記中心の授業になっていること（肯定が74.6％）、その結果、生徒の歴史的思考力を育成する授業が十分展開されていないこと（肯定が80.5％）など、大学入試が高校の歴史教育を大きく制約している点については７-８割の肯定的意見が表明された。他方、生徒の歴史系科目への関心が低いかどうか、については肯定が51.7％で、ようやく過半数を超える程度であった。このことは教え方によっては生徒の関心を引き出せることを意味していると評価できるだろう」と指摘されている[2]。すなわち、少なくとも教員の側から見る限り、「歴史離れ」の最大の要因は高校生や大学生の関心そのものが根源的に低下していることによるのではなく、歴史の勉強が暗記と誤解されている点にあり、その誤解を解消し、思考を重視する歴史学本来の魅力を伝えれば、「歴史離れ」を解消できると判断された。

こうした現状認識に基づく、暗記中心から思考力重視の歴史学習への転換は、小中学校を含め、新学習要領における「アクティブ・ラーニング」重視の方針ともなじむものと言える。加えて高等学校については、上記アンケートに基づく提言が、日本史及び世界史の基礎的学習を統合する科目「歴史総合」の新設と必修化、2021年度入試（2020年度実施）から導入される大学入学共通テスト（新テスト）における思考力・表現力の重視など、具体的変革の背景ともなっている。歴史研究を専門とする者であれば、カー（1962）が明言するように、歴史研究とは現代を生きる歴史家あっての営為であり、自身の問題意識に基づいて調査対象を

1　この資料については、日本歴史学協会のサイト内の「若手研究者問題」ページ（http://www.nichirekikyo.com/young_researchers/young_researchers.html）にある2016年度活動「シンポジウム　歴史学の担い手をいかに育て支えるか～日本歴史学協会『若手研究者問題』アンケート調査中間報告から～」のリンク先にある参考資料として閲覧可能である（最終閲覧日：2019年９月３日）。なお、起点となる1992年と比べ、史学専攻の大学院生・志願者が100％を超えている年もあるが、それらの数字も人文科学分野全体での伸び率に及ぶことはない点からすれば、やはり歴史学に関する人気の相対的低潮は否定できないだろう。

2　同アンケートの結果と解説については、http://www.npo-if.jp/worldhistory/wp-content/uploads/2015/10/result_anketa2014.pdf として公表されている（最終閲覧日：2019年９月23日）。

選択し、それに関する情報を得るために史料を渉猟しつつ、その内容を批判的に解読・精査して一旦の仮説に至る、歴史学の基本的な作業の流れが、まさしく思考力なしに成立しようもないことは自明であろう。その意味で今回の変革は、歴史学の本質に立ち戻る試みと位置付けられる。

ただしそれとともに提示されている、生徒の関心を巡る評価については疑問も残る。この「関心」の程度が明らかではないからであり、51.7％という（教師側の視点による）数字にしても、一概に高いとは言えないように思われる。また、それこそアレルギー的に歴史学習を最初から拒絶してしまう生徒であれば、「関心がない」とも断言し得るが、それを除けば、関心の幅は本来かなり多様であり、この関心の強度こそが歴史教育において最も重大な規定要因となっている可能性も否定できない。つまり、もともと過去や歴史への関心が高い生徒であれば、たとえ暗記であっても、対象が歴史的事実である場合、さほど負担を感じず、むしろそれこそを楽しみと受け止める可能性もあるのではないか（これは単なる憶測ではなく、筆者（田中）の個人的経験を振り返っての見解である。とはいえ、このような歴史学習を正当視しているわけではない）。その意味では、現在志向されている変革は、歴史的思考力を重視した授業機会を提供することで、歴史に対する生徒の関心を生み出したり高めたりすることを目指す手段とも捉え得る。そこで、むしろ本稿では、近年の「歴史離れ」が児童・生徒における歴史への関心自体の低下によっている可能性があり、その主たる要因が幼年期、具体的には小学６年生までに歴史的素材に触れる機会が、以前より減少していることに求められるのではないかとのひとまずの仮説に立ち、その検証を図ることを目的とする。

３年次から始まる小学校の社会科教育においては、地域学習の一端として、現住地域の過去について調査・学習する機会もあるとはいえ、基本的に通史的な歴史学習はようやく６年生の前半に始まり、さらに新学習指導要領の施行以降はその機会が６年生の後半に移る可能性が高い。この点自体は以前とそれほどは変わらないかと思われるものの、それ以外に歴史に触れる機会自体は、環境的に大きく変化している印象が強い。娯楽が多様化・個別化する中で、児童・生徒の日常生活・意識において歴史小説・漫画・ドラマなどが占めていた比重も大幅に低下していることが予想される。ちなみに南塚（2019）では、現代日本においても「ネット歴史」「テレビの歴史ドラマ・ドキュメンタリー」「歴史漫画」「歴史小説」「歴史書」など、歴史に触れる機会は多彩であることを指摘しつつ、それぞれの特徴や問題性に留意する必要性を説いている。この主張そのものに異論はないが、それら多彩な機会が、とりわけ現在の若年層に対し実際に量的に機能しているかどうかについては、改めて確認する必要があるように思われる。理想を言えば、これら多彩な歴史の相違性を認知できるよう、早い年齢段階から教育すべきかもしれない。しかし現行の小学校カリキュラムではそうした活動は想定されていないことからすれば、まずは関心そのものを持ってもらうことを優先する場合、極論かもしれないながら、機会の種類自体は問わないこともあり得よう。無論、それらの機会を通じて児童・生徒の内面に作られた一定の歴史観・歴史像に対し、それを相対的に検討する機会も必須であり、むしろそのような考察を契機として、日髙（2019）に示されるような、「歴史に出会った」ことを自覚する、あるいは「歴史的に考える」ことが促進される側面もあるのではないだろうか。

以上の認識を背景に我々は、小学生における歴史への興味・関心を高める機会を探るべく、児童・生徒の周囲に存在する教科書・文学作品・娯楽作品などを取り上げ、それらを用いて歴史的思考力を涵養する手段について検討する試みとして、2019年度宮城教育大学重点支援研究課題「小学校教材・児童文学・娯楽作品を介しての歴史的思考力の涵養可能性」を企画した。本稿ではそれを進める前提として、小学生の意識の現状や彼らを取り巻く環境について改めて確認する必要があると考え、３つの観点から調査・分析を行った。まず第２章では、高等学校や大学の状況を判断材料として語られがちな「歴史離れ」について、現在の小学生の実像をアンケート調査から探る。この章については、本学教育学部社会科教育講座で日本史を専門分野とする堀田が担当する。次いで第３章では、学校の授業や教科書以外で小学生が歴史に触れる機会の有無、その素材について、彼らの読書経験を中心に、社会科教育講座で外国史を担当する田中が調査する。そして、こうした授業外の契機と並列の位置にあるのが、小学校における他教科の学習機会であろう。特に小学校１

年次から授業があるとともに、広範な分野のテキストを扱う国語は、貴重な契機となり得ることが予想される。第４章では、国語教育講座で国語学を専門とする津田が、現在の国語教材の内容紹介とともに、それらを通じて歴史的思考力を涵養する可能性について考察する。

２.「歴史」への興味・関心に関する現状把握

⑴　小学４ ～ ６年生の様子

歴史的思考力涵養のための新たな素材を検討する前に、そもそも現在の児童・生徒たち自身が歴史への興味・関心を持っているのか、あるいは、持っていないのか、持っているとするならば、どれほどの興味を持ち、何をきっかけに関心を強めたのか、そういった現状を把握する必要があろう。

そこで、筆者（堀田）は、宮城県内の６つの小学校に御協力いただき、４年生以上の学年を対象[3]とするアンケートを実施することによって、まずは、小学生たちの「歴史」への興味・関心の有無や程度について基礎的な情報を得ることから始めることとした。以下、本章では、このアンケートをもとに見えてきた小学生たちの様子について述べていくことにする。

まず、アンケート用紙の様式についてだが、実施学年と実施年月日を記す欄を設けたものの、氏名や男女の別を記す欄は敢えて設けず、無記名形式のものとした。質問項目は、「歴史」に興味があるかどうか、興味を持ったきっかけは何なのかを問う２つの質問のみであり、短時間で実施できる内容となっている（図１参照）。質問１において「歴史」に興味があるかどうかを問い、「（1）興味がある」、ないし、「（2）どちらかというと興味がある」を選んだ児童に向けて、興味を持ったきっかけを問う質問２を設けている。質問２では「歴史」に興味を持ったきっかけのうち最も当てはまるものを17の選択肢の中から１つだけ選ぶ形を採っている。

御協力いただいた小学校は６つの学校であり、６校全体で、４年生400人、５年生391人、６年生372人、合計1,163人の回答を得ることができた。各小学校の所在地及びアンケートの実施日は表１の通りである。では、集計結果について述べることにしよう[4]。「学界外の日本社会」における深刻な「歴史離れ」が指摘されている昨今（桃木, 2009, P. 19）、果たして、小学生たちも「歴史」への興味を失ってしまっているのであろうか。

まず、質問１について、学校別の集計表（表２－①）をご覧いただきたい。これを見ると、それぞれの学校において、「歴史」に「（1）興味がある」及び「（2）どちらかというと興味がある」と回答した児童の合計数は713人（小学校Ａが３つの学年で24人、Ｂが197人、Ｃが247人、Ｄが139人、Ｅが66人、Ｆが40人）で、「（3）あまり興味がない」及び「（4）興味がない」と答えた児童の合計数448人（小学校Ａが３つの学年で21人、Ｂが163人、Ｃが83人、Ｄが133人、Ｅが37人、Ｆが11人）を大きく上回っており、全体的な傾向としては、全ての学校において「歴史」に一定程度以上の興味・関心を示す児童数の方が多いことが分かる。

ただし、その割合を比較してみると、学校ごとの違いが見られ、小学校ＣやＦでは全ての学年で（1）・（2）と回答した人数の方が（3）・（4）と回答した人数を大きく上回っており、Ｃの６年生とＦの５・６年生にあっては80％以上の児童が「歴史」に興味・関心を持っていることが分かる。これら２つの小学校では、３つの学年全体で見ても70％以上の高い割合で「歴史」への興味・関心を示す児童が存在していることになる。

一方で、小学校Ｄにあっては、６年生の中で（1）・（2）と回答した児童数が60％を越えていることから３つの学年全体としては「歴史」に興味・関心を示す児童数の方が多くなっているものの、４年生と５年生の２つの学年で、（3）・（4）と回答した児童数の方が（1）・（2）と回答した児童数を上回っており、学年による違いが見られる。

3　なお、小学校における歴史的要素が入った学習は３年生から始まるが、同一のアンケート用紙を使い答えられる年齢を考慮し、小学校４年生以上を対象に実施することとした。

4　なお、集計作業を行うに当たっては、質問通りに答えている者のみを有効回答者として採用している。すなわち、質問１（「歴史」に興味があるかどうかに関する質問）を集計するに当たっては、質問１に答えていないにもかかわらず質問２の選択肢を選んでいる者（質問１における未選択者）を除外しており、また、質問２（「歴史」に興味をもったきっかけに関する質問）を集計するに当たっては、質問１における未選択者、質問１において（1）や（2）を選んでいるにもかかわらず質問２に答えていない者、及び、質問２において複数の選択肢に丸をつけている者を除外し、有効回答者数を割り出していることを予めお断りしておく。

学年：＿＿＿年生　　実施年月日：2019年＿＿＿月＿＿＿日

「歴史」に興味はありますか？？

1．あなたは「歴史」に興味がありますか？　次の（1）～（4）のうち、いちばん当てはまるもの1つに○をつけてください。

（1）興味がある　（2）どちらかというと興味がある　（3）あまり興味がない　（4）興味がない

2．（1）または（2）を選んだ方に質問です。　「歴史」に興味を持ったきっかけは何ですか？　次の①～⑰のうち、いちばん当てはまるもの1つに○をつけてください。

たとえば？　具体例を書いてください。

① 小学校の授業　〔例：国語の授業　〕
② 小学校の教科書　〔例：社会科の教科書　〕
③ マンガ　〔例：日本の歴史　〕
④ 小説　〔　〕
⑤ 偉人の伝記　〔　〕
⑥ ②～⑤以外の本や雑誌　〔　〕
⑦ ゲーム　〔　〕
⑧ テレビ（ドラマ）　〔　〕
⑨ テレビ（アニメ）　〔　〕
⑩ テレビ（バラエティー）　〔　〕
⑪ テレビ（報道・ドキュメント）　〔　〕
⑫ 映画（実写）　〔　〕
⑬ 映画（アニメ）　〔　〕
⑭ 映画（ドキュメント）　〔　〕
⑮ インターネット（ホームページ）　〔　〕
⑯ インターネット（YouTubeなどの動画）〔　〕
⑰ その他　〔　〕

ご協力ありがとうございました。

図１　「歴史」への興味に関するアンケート用紙

表１　協力校の所在地及びアンケート実施日

小学校Ａ（所在地：石巻市） ①４年生：2019年６月７・10日 ②５年生：2019年６月７日 ③６年生：2019年６月７・10日	小学校Ｂ（所在地：大和町） ①４年生：2019年６月５・12日 ②５年生：2019年６月５・６・11日 ③６年生：2019年６月５・６日	小学校Ｃ（所在地：仙台市青葉区） ①４年生：2019年５月28～31日 ②５年生：2019年５月23・24日 ③６年生：2019年５月27・29・30日
小学校Ｄ（所在地：仙台市宮城野区） ①４年生：2019年６月12・14日 ②５年生：2019年６月13・18日 ③６年生：2019年６月12・14日	小学校Ｅ（所在地：仙台市青葉区） ①４年生：2019年７月４日 ②５年生：2019年７月５日 ③６年生：2019年７月５日	小学校Ｆ（所在地：山元町） ①４年生：2019年６月13日 ②５年生：2019年６月３日 ③６年生：2019年６月17日

表２－①　質問１に関する集計表（学校別）

小学校（所在地）	学　年	児童数	有効回答者数＊	質問１(1)	質問１(2)	質問１(3)	質問１(4)	質問１(1)＋(2)	質問１(3)＋(4)
A（石巻市）	4	11	11	3	1	3	4	4	7
			100.0%	27.3%	9.1%	27.3%	36.4%	36.4%	63.6%
	5	16	16	4	4	6	2	8	8
			100.0%	25.0%	25.0%	37.5%	12.5%	50.0%	50.0%
	6	18	18	5	7	5	1	12	6
			100.0%	27.8%	38.9%	27.8%	5.6%	66.7%	33.3%
小学校Ａ小計		45	45	12	12	14	7	24	21
			100.0%	26.7%	26.7%	31.1%	15.6%	53.3%	46.7%
B（大和町）	4	126	126	24	25	35	42	49	77
			100.0%	19.0%	19.8%	27.8%	33.3%	38.9%	61.1%
	5	131	131	38	42	35	16	80	51
			100.0%	29.0%	32.1%	26.7%	12.2%	61.1%	38.9%
	6	103	103	34	34	33	2	68	35
			100.0%	33.0%	33.0%	32.0%	1.9%	66.0%	34.0%
小学校Ｂ小計		360	360	96	101	103	60	197	163
			100.0%	26.7%	28.1%	28.6%	16.7%	54.7%	45.3%
C（仙台市）	4	114	114	47	38	25	4	85	29
			100.0%	41.2%	33.3%	21.9%	3.5%	74.6%	25.4%
	5	112	111	45	32	26	8	77	34
			100.0%	40.5%	28.8%	23.4%	7.2%	69.4%	30.6%
	6	105	105	47	38	17	3	85	20
			100.0%	44.8%	36.2%	16.2%	2.9%	81.0%	19.0%
小学校Ｃ小計		331	330	139	108	68	15	247	83
			100.0%	42.1%	32.7%	20.6%	4.5%	74.8%	25.2%
D（仙台市）	4	94	93	23	19	26	25	42	51
			100.0%	24.7%	20.4%	28.0%	26.9%	45.2%	54.8%
	5	85	85	18	20	37	10	38	47
			100.0%	21.2%	23.5%	43.5%	11.8%	44.7%	55.3%
	6	94	94	31	28	29	6	59	35
			100.0%	33.0%	29.8%	30.9%	6.4%	62.8%	37.2%
小学校Ｄ小計		273	272	72	67	92	41	139	133
			100.0%	26.5%	24.6%	33.8%	15.1%	51.1%	48.9%
E（仙台市）	4	39	39	10	17	6	6	27	12
			100.0%	25.6%	43.6%	15.4%	15.4%	69.2%	30.8%
	5	31	31	5	9	12	5	14	17
			100.0%	16.1%	29.0%	38.7%	16.1%	45.2%	54.8%
	6	33	33	11	14	3	5	25	8
			100.0%	33.3%	42.4%	9.1%	15.2%	75.8%	24.2%
小学校Ｅ小計		103	103	26	40	21	16	66	37
			100.0%	25.2%	38.8%	20.4%	15.5%	64.1%	35.9%
F（山元町）	4	16	16	8	2	5	1	10	6
			100.0%	50.0%	12.5%	31.3%	6.3%	62.5%	37.5%
	5	16	16	7	6	3	0	13	3
			100.0%	43.8%	37.5%	18.8%	0.0%	81.3%	18.8%
	6	19	19	9	8	2	0	17	2
			100.0%	47.4%	42.1%	10.5%	0.0%	89.5%	10.5%
小学校Ｆ小計		51	51	24	16	10	1	40	11
			100.0%	47.1%	31.4%	19.6%	2.0%	78.4%	21.6%
合　　計		1163	1161	369	344	308	140	713	448
			100.0%	31.8%	29.6%	26.5%	12.1%	61.4%	38.6%

＊有効回答者数は、質問１における未選択者を除外した人数である。

学年による違いという観点から言えば、「歴史」に興味・関心を示す児童の割合がＡ～Ｆ全ての学校において６年生で最も高くなっており、小学校における歴史学習が本格的に始まる学年ということもあってか、「歴史」に対する興味・関心をより持ちやすい学年であることが分かる。ただし、この傾向を小学校における授業との関連でのみ解釈するのは誤りであり、この点については、後述する。

学年別の傾向は、表２－②からも明らかであり、質問１に対して(1)・(2)と回答した小学校Ａ～Ｆの４年生の合計数は217人、同じく５年生のそれは230人、６年生のそれは266人で、割合に直せば、４年生は全体の54.4％、５年生は全体の59％、６年生は全体の71.5％の児童が「歴史」に興味・関心を示している。すなわち、全体的な傾向としては、学年が上がるごとに「歴史」に対する興味・関心が高まっていくことが指摘でき、特に、６年生になった段階でより高まる傾向も見て取れよう。

表２－②　質問１に関する集計表（学年別）

小学校（所在地）	学　年	児童数	有効回答者数＊	質問１（1）	質問１（2）	質問１（3）	質問１（4）	質問１（1）＋（2）	質問１（3）＋（4）
A（石巻市）	4	11	11	3	1	3	4	4	7
B（大和町）	4	126	126	24	25	35	42	49	77
C（仙台市）	4	114	114	47	38	25	4	85	29
D（仙台市）	4	94	93	23	19	26	25	42	51
E（仙台市）	4	39	39	10	17	6	6	27	12
F（山元町）	4	16	16	8	2	5	1	10	6
４年生合計		400	399	115	102	100	82	217	182
			100.0%	28.8%	25.6%	25.1%	20.6%	54.4%	45.6%
A（石巻市）	5	16	16	4	4	6	2	8	8
B（大和町）	5	131	131	38	42	35	16	80	51
C（仙台市）	5	112	111	45	32	26	8	77	34
D（仙台市）	5	85	85	18	20	37	10	38	47
E（仙台市）	5	31	31	5	9	12	5	14	17
F（山元町）	5	16	16	7	6	3	0	13	3
５年生合計		391	390	117	113	119	41	230	160
			100.0%	30.0%	29.0%	30.5%	10.5%	59.0%	41.0%
A（石巻市）	6	18	18	5	7	5	1	12	6
B（大和町）	6	103	103	34	34	33	2	68	35
C（仙台市）	6	105	105	47	38	17	3	85	20
D（仙台市）	6	94	94	31	28	29	6	59	35
E（仙台市）	6	33	33	11	14	3	5	25	8
F（山元町）	6	19	19	9	8	2	0	17	2
６年生合計		372	372	137	129	89	17	266	106
			100.0%	36.8%	34.7%	23.9%	4.6%	71.5%	28.5%

＊有効回答者数は、質問１における未選択者を除外した人数である。

ただし、この傾向も、学校ごとに子細に見ていくと、４年生→５年生→６年生と「歴史」に対する興味・関心が順調に高まっていく学校ばかりではなく、小学校Ｃ～Ｅでは、(1)・(2) と回答した児童の割合が５年生で最も低くなっており、４年生の方が「歴史」に対する興味・関心を示す児童の割合が高くなっている。このように学校ごとのバラツキが見られることも確かである。

では、次に、児童たちが「歴史」に興味を持つに至った「きっかけ」について表３にまとめたので御覧いただきたい。質問２の回答をもとにまとめた表である。なお、「きっかけ」を集計するに当たっては、①～⑰の選択肢を、「授業関係」（選択肢①・②）、「読み物関係」（③～⑥）、「ゲーム関係」（⑦）、「テレビ関係」（⑧～⑪）、「映画関係」（⑫～⑭）、「ネット関係」（⑮･⑯）、「その他」（⑰）の７つの項目にまとめている。

まず、表３－①を一覧してお気付きのように、全ての学校、全ての学年において、児童たちに「歴史」への興味・関心を抱かせた最も大きな「きっかけ」は、質問２の選択肢③～⑥の割合、すなわち、「読み物関係」の割合が他に抜きん出て高いことが分かる。「読み物関係」を選んだ児童数は６校合計で355人おり、有効回答者数全体の52.4％、「テレビ関係」は合計105人で全体の15.5％、「授業関係」は合計87人で全体の12.8％、「その他」は合計73人で全体の10.8％、「ゲーム関係」は合計24人で全体の3.5％、「ネット関係」は合計19人で全体の2.8％、「映画関係」は合計15人で全体の2.2％となっており、「読み物関係」の割合は他の選択肢の割合を圧倒しているのである。

また、小学校における本格的な歴史学習が始まる６年生において、「授業関係」の割合が高まる傾向にあり、６年生に絞って確認してみると、小学校Ａを除

く５つの学校の６年生において「授業関係」の割合が「読み物関係」の次に高い数値を示している[5]。しかるに、その割合は、小学校Ｂの６年生で「読み物関係」が42.6％に対して「授業関係」は32.4％、同じくＣの６年生で「読み物関係」が63.5％に対して「授業関係」は14.9％、Ｄの６年生で「読み物関係」が35.6％に対して

表３－①　質問２に関する集計表（学校別）

小学校（所在地）	学　年	児童数	有効回答者数＊	授業関係（①・②）	読み物関係（③～⑥）	ゲーム関係（⑦）	テレビ関係（⑧～⑪）	映画関係（⑫～⑭）	ネット関係（⑮・⑯）	その他（⑰）
A（石巻市）	4	11	4		1	1	1			1
			100.0%	0.0%	25.0%	25.0%	25.0%	0.0%	0.0%	25.0%
	5	16	8		4		2			2
			100.0%	0.0%	50.0%	0.0%	25.0%	0.0%	0.0%	25.0%
	6	18	12		5		5	1		1
			100.0%	0.0%	41.7%	0.0%	41.7%	8.3%	0.0%	8.3%
小学校Ａ小計		45	24	0	10	1	8	1	0	4
			100.0%	0.0%	41.7%	4.2%	33.3%	4.2%	0.0%	16.7%
B（大和町）	4	126	47	4	23	2	5		6	7
			100.0%	8.5%	48.9%	4.3%	10.6%	0.0%	12.8%	14.9%
	5	131	79	10	44	1	10	4	2	8
			100.0%	12.7%	55.7%	1.3%	12.7%	5.1%	2.5%	10.1%
	6	103	68	22	29	1	12			4
			100.0%	32.4%	42.6%	1.5%	17.6%	0.0%	0.0%	5.9%
小学校Ｂ小計		360	194	36	96	4	27	4	8	19
			100.0%	18.6%	49.5%	2.1%	13.9%	2.1%	4.1%	9.8%
C（仙台市）	4	114	83	3	59	3	10	4	1	3
			100.0%	3.6%	71.1%	3.6%	12.0%	4.8%	1.2%	3.6%
	5	112	72	1	34	2	16		2	17
			100.0%	1.4%	47.2%	2.8%	22.2%	0.0%	2.8%	23.6%
	6	105	74	11	47	2	5		1	8
			100.0%	14.9%	63.5%	2.7%	6.8%	0.0%	1.4%	10.8%
小学校Ｃ小計		331	229	15	140	7	31	4	4	28
			100.0%	6.6%	61.1%	3.1%	13.5%	1.7%	1.7%	12.2%
D（仙台市）	4	94	39	2	22	4	5		3	3
			100.0%	5.1%	56.4%	10.3%	12.8%	0.0%	7.7%	7.7%
	5	85	35	4	15	2	6	4	2	2
			100.0%	11.4%	42.9%	5.7%	17.1%	11.4%	5.7%	5.7%
	6	94	59	16	21	4	12	1		5
			100.0%	27.1%	35.6%	6.8%	20.3%	1.7%	0.0%	8.5%
小学校Ｄ小計		273	133	22	58	10	23	5	5	10
			100.0%	16.5%	43.6%	7.5%	17.3%	3.8%	3.8%	7.5%
E（仙台市）	4	39	26	2	9		6	1	1	7
			100.0%	7.7%	34.6%	0.0%	23.1%	3.8%	3.8%	26.9%
	5	31	14	1	7	1	3			2
			100.0%	7.1%	50.0%	7.1%	21.4%	0.0%	0.0%	14.3%
	6	33	22	5	9	1	4		1	2
			100.0%	22.7%	40.9%	4.5%	18.2%	0.0%	4.5%	9.1%
小学校Ｅ小計		103	62	8	25	2	13	1	2	11
			100.0%	12.9%	40.3%	3.2%	21.0%	1.6%	3.2%	17.7%
F（山元町）	4	16	9	1	6		2			
			100.0%	11.1%	66.7%	0.0%	22.2%	0.0%	0.0%	0.0%
	5	16	11		11					
			100.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	6	19	16	5	9		1			1
			100.0%	31.3%	56.3%	0.0%	6.3%	0.0%	0.0%	6.3%
小学校Ｆ小計		51	36	6	26	0	3	0	0	1
			100.0%	16.7%	72.2%	0.0%	8.3%	0.0%	0.0%	2.8%
合　　計		1163	678	87	355	24	105	15	19	73
			100.0%	12.8%	52.4%	3.5%	15.5%	2.2%	2.8%	10.8%

＊有効回答者数は、質問２の回答者のうち、質問１における未選択者及び質問２における複数選択者を除外した人数である。

5　時期的にいって（表１参照）、最も早くアンケートを実施した小学校Ｃの６年生（2019年５月27・29・30日実施）と最も遅く実施したＥの６年生（2019年７月５日実施）を比較してみると、「授業関係」を選んだ割合は、Ｃが14.9％に対してＥが22.7％となっており、小学校Ｅの６年生の方がＣの６年生よりも１か月以上長く歴史の授業を受けているため、こうした差が生じたとも推測できるが、Ｅの６年生よりも１か月ほど前にアンケートを実施したはずの小学校Ｂの６年生（2019年６月５・６日実施）の方が、「授業関係」を選んだ児童の割合が9.7％高い数値を示しており（Ｂが32.4％、Ｅが22.7％）、アンケートの実施時期との、すなわち、授業を受けた「回数」との相関関係は見られない。

「授業関係」は27.1％、Ｅの６年生で「読み物関係」が40.9％に対して「授業関係」は22.7％､Ｆの６年生で「読み物関係」が56.3％に対して「授業関係」は31.3％となっており、「読み物関係」と「授業関係」の数値には開きが見られる。

これを学年別にまとめた表３－②で再度確認してみると、やはり全ての学年で「読み物関係」が高い数値を保っており、一方で、４・５年生とは異なり６年生では「授業関係」が「読み物関係」の次に高い数値を示している。したがって、６年生の場合、やはり、社会科の歴史の授業の影響が看取できるのではあるが、数値的には、「読み物関係」を選んだ６年生の合計120人（６年生の有効回答者数全体の47.8％）に対して､「授業関係」を選んだ６年生の合計は59人（全体の23.5％）であり、倍以上の差が見られる。

こうした「学年と歴史に興味を持ったきっかけ」については、2019年３月に東北大学社会教育主事講習仙台市Ｂチーム（以下､Ｂチームと表記）によるアンケート結果が公表されている[6]。Ｂチームは仙台市内の４つの小学校（南材木町小学校、袋原小学校、人来田小学校、桂小学校）の５・６年生を対象に質問紙によるアンケート調査を実施し、４校合計で547人からの回答を得ており、その集計結果をまとめている。Ｂチームの配付したアンケート用紙にも、本研究課題の調査と同じように、「歴史への興味のきっかけ」を問う質問項目が設けられており、「授業」、「テレビ」、「本や

表３－②　質問２に関する集計表（学年別）

小学校（所在地）	学　年	児童数	有効回答者数＊	授業関係（①・②）	読み物関係（③～⑥）	ゲーム関係（⑦）	テレビ関係（⑧～⑪）	映画関係（⑫～⑭）	ネット関係（⑮・⑯）	その他（⑰）
A（石巻市）	4	11	4		1	1	1			1
B（大和町）	4	126	47	4	23	2	5		6	7
C（仙台市）	4	114	83	3	59	3	10	4	1	3
D（仙台市）	4	94	39	2	22	4	5		3	3
E（仙台市）	4	39	26	2	9		6	1	1	7
F（山元町）	4	16	9	1	6		2			
４年生合計		400	208	12	120	10	29	5	11	21
			100.0%	5.8%	57.7%	4.8%	13.9%	2.4%	5.3%	10.1%
A（石巻市）	5	16	8		4		2			2
B（大和町）	5	131	79	10	44	1	10	4	2	8
C（仙台市）	5	112	72	1	34	2	16		2	17
D（仙台市）	5	85	35	4	15	2	6	4	2	2
E（仙台市）	5	31	14	1	7	1	3			2
F（山元町）	5	16	11		11					
５年生合計		391	219	16	115	6	37	8	6	31
			100.0%	7.3%	52.5%	2.7%	16.9%	3.7%	2.7%	14.2%
A（石巻市）	6	18	12		5		5	1		1
B（大和町）	6	103	68	22	29	1	12			4
C（仙台市）	6	105	74	11	47	2	5		1	8
D（仙台市）	6	94	59	16	21	4	12	1		5
E（仙台市）	6	33	22	5	9	1	4		1	2
F（山元町）	6	19	16	5	9		1			1
６年生合計		372	251	59	120	8	39	2	2	21
			100.0%	23.5%	47.8%	3.2%	15.5%	0.8%	0.8%	8.4%

＊有効回答者数は、質問２の回答者のうち、質問１における未選択者及び質問２における複数選択者を除外した人数である。

6　大久保裕隆・高橋龍馬・永山達郎・村田智朗・土井謙治（2019）「市内小学生における仙台市博物館の利活用の現状と展望～児童の意識調査と博物館職員への聞き取り調査を通して～」（『仙台市博物館調査研究報告』第39号）。

マンガ」、「インターネット」、「家族の影響」、「友達の影響」、「ゲーム」、「伊達武将隊」、「博物館に行ったこと」の９つの選択肢から「複数回答可」という条件で意識調査を実施したことが分かる。論文の図７に示された集計結果によれば、「五年生と六年生で比較してみると、テレビ、本やマンガ等の項目では学年による差はそれほど見られない」ものの、「授業の項目を見ると、五年生が一〇％、六年生が四一％であり、授業で歴史を学習すると興味を持つ児童が多くなることが分かった」としている[7]。

筆者が行った調査でも、６年生については、「歴史」に興味を持った「きっかけ」として「授業関係」を選んだ児童の数が４年生や５年生に比べ多くなっていることは前述した通りである。ただし、本研究課題が実施したように、「『歴史』に興味を持ったきっかけは何」なのか「いちばん当てはまるもの１つ」だけを選択させた時には、たとえ小学６年生であっても、「授業関係」を選んだ児童数の倍以上の人数が「読み物関係」を選んだことも事実である。Ｂチームのように、「複数回答可」という方法を採れば、歴史学習を実際に行っている最中の６年生たちは「授業」を選択する可能性が高まるであろうから、Ｂチームの集計結果と本研究課題の集計結果の違いは、この点に起因しているものと考えられよう。筆者の調査は、小学生たちに「歴史」への興味・関心を抱かせた最も影響力のある「きっかけ」を探っており、そうした調査によれば、児童たち自身が認識する「いちばん」の「きっかけ」は「授業関係」ではなく「読み物関係」であるという結果が得られたということである。

なお、Ｂチームの集計結果でも「本やマンガ」の割合が５年生・６年生ともに高い数値を示しており、５年生にあっては上記９つの選択肢の中で最も高い数値を示している。「複数選択可」という方法を採ったとしても、やはり、「本やマンガ」（＝本稿がいう「読み物関係」）を選択する児童が多いことが分かり、本稿における調査結果と一致している。

では、小学生たちに「歴史」への興味・関心を高めさせる「きっかけ」として最も大きな影響を与える「読み物関係」の中でも一番影響力があるのは、どのジャンルであろうか。次に、この点について探ってみたい。本稿で「読み物関係」と一括りにしたジャンルは、アンケート用紙の「③マンガ」、「④小説」、「⑤偉人の伝記」、「⑥ ②～⑤以外の本や雑誌」の４つの選択肢であり、③～⑥を個別に集計したものが表４－①・②である[8]。

まず、全体的な傾向として、「読み物関係」の中でも「③マンガ」を選んだ児童がかなり多いということが分かる。学校ごとの小計を見ると、６校のうち４校において③の割合が50％以上であり、小学校Ｅにあっては、「読み物関係」にまとめた児童のうち76％が③を選んでいる。Ｃ～Ｅでは、３つの学年全てで③を選んだ割合が最も高くなっており、残るＡ・Ｂ・Ｆにおいても、４年生と６年生で③の割合が最も高い。逆に言えば、「読み物関係」の中で「③マンガ」ではないジャンルを選んだ児童数の多いところが珍しく、小学校ＡとＦの５年生では「⑤偉人の伝記」を選んだ児童数が最も多く、Ｂの同じく５年生では「④小説」が最も多くなっている。

注意が必要なのは、「⑤偉人の伝記」を選んだ児童たちが読んだ本が、実は漫画で書かれた伝記であった可能性もあり、アンケート用紙の内容上、今回の調査ではそこまでは判断できない。

学年別に見てみると、やはり、３つの学年全てで、「読み物関係」を選択した児童のうち50％前後が③を選んでおり（表４－②参照）、４年生と６年生では「⑤偉人の伝記」の割合が、５年生では「④小説」の割合が③に次いで高くなっている。

では、小学生たちは「③マンガ」の中でも具体的に何を読んで「歴史」に興味を持ったというのであろうか。本研究課題のアンケート用紙には、各選択肢の横に具体例を記述してもらう箇所を設けており、そこに記された児童たちの記述を頼りに探ってみると、「日本の歴史」という記述が目立っている。これは、アンケート用紙に「例：日本の歴史」と事前に記しておいたことが影響している可能性もあり、６つの小学校全ての回答に「日本の歴史」という記述を見つけることができる。ただし、中には、「コミックばん日本の歴史」（小学校Ｂ）、「コミック版日本の歴史」・「日本の歴史

7　以上、大久保ほか（2019, PP. 55, 58-59）を参照。以下も同じ。
8　なお、集計作業を行うに当たって、漫画で描かれた偉人の伝記は「③マンガ」に入れた。

表４－①　「読み物関係」に関する集計表（学校別）

小学校（所在地）	学　年	児童数	読み物関係（③～⑥）選択者数	③ マンガ	④ 小説	⑤ 偉人の伝記	⑥ ②～⑤以外の本や雑誌
A（石巻市）	4	11	1	1			
			100.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	5	16	4	1		2	1
			100.0%	25.0%	0.0%	50.0%	25.0%
	6	18	5	3		2	
			100.0%	60.0%	0.0%	40.0%	0.0%
小学校Ａ小計		45	10	5	0	4	1
			100.0%	50.0%	0.0%	40.0%	10.0%
B（大和町）	4	126	23	11	8	3	1
			100.0%	47.8%	34.8%	13.0%	4.3%
	5	131	44	16	18	7	3
			100.0%	36.4%	40.9%	15.9%	6.8%
	6	103	29	19	2	4	4
			100.0%	65.5%	6.9%	13.8%	13.8%
小学校Ｂ小計		360	96	46	28	14	8
			100.0%	47.9%	29.2%	14.6%	8.3%
C（仙台市）	4	114	59	28	8	17	6
			100.0%	47.5%	13.6%	28.8%	10.2%
	5	112	34	18	5	8	3
			100.0%	52.9%	14.7%	23.5%	8.8%
	6	105	47	25	3	15	4
			100.0%	53.2%	6.4%	31.9%	8.5%
小学校Ｃ小計		331	140	71	16	40	13
			100.0%	50.7%	11.4%	28.6%	9.3%
D（仙台市）	4	94	22	11	6	4	1
			100.0%	50.0%	27.3%	18.2%	4.5%
	5	85	15	9	3	3	
			100.0%	60.0%	20.0%	20.0%	0.0%
	6	94	21	10	1	8	2
			100.0%	47.6%	4.8%	38.1%	9.5%
小学校Ｄ小計		273	58	30	10	15	3
			100.0%	51.7%	17.2%	25.9%	5.2%
E（仙台市）	4	39	9	7		2	
			100.0%	77.8%	0.0%	22.2%	0.0%
	5	31	7	6	1		
			100.0%	85.7%	14.3%	0.0%	0.0%
	6	33	9	6	1	2	
			100.0%	66.7%	11.1%	22.2%	0.0%
小学校Ｅ小計		103	25	19	2	4	0
			100.0%	76.0%	8.0%	16.0%	0.0%
F（山元町）	4	16	6	3		2	1
			100.0%	50.0%	0.0%	33.3%	16.7%
	5	16	11	4		5	2
			100.0%	36.4%	0.0%	45.5%	18.2%
	6	19	9	4	2	2	1
			100.0%	44.4%	22.2%	22.2%	11.1%
小学校Ｆ小計		51	26	11	2	9	4
			100.0%	42.3%	7.7%	34.6%	15.4%
合　　計		1163	355	182	58	86	29
			100.0%	51.3%	16.3%	24.2%	8.2%

１～12かん　世界の歴史1～12かん」・「日本の歴史①～⑮別巻付き」・「日本の歴史・世界の歴史シリーズ」・「中国　日本　世界の歴史①～⑳」（C）、「日本の歴史シリーズ」（D）、「日本の歴史と世界の歴史」（E）といった記述も見られ、いわゆる学習漫画を読んだことがきっかけで「歴史」に興味を持つようになったことが明らかな事例が見られる。

学習漫画については、近年、売れに売れており、「学習漫画の『日本の歴史』シリーズは、ほとんどの大手出版社が取り上げ、小学生からその祖父母までの広い世代に購入されている」ことが南塚（2019, P. 12）によって指摘されている[9]。今回の調査でも、やはり、小学生たちがこうした学習漫画をきっかけに「歴史」に興味を持っていく様子が看取でき、換言すれば、学

9　なお、松方（2017, PP. 105-106）でも近年の学習漫画をめぐる状況が述べられている。

習漫画が小学生たちに与える影響は無視できないものがあるということが分かる[10]。この問題については、次章で改めて取り上げることとしたい。

なお、表３で「授業関係」に入れた「②小学校の教科書」も読み物といえば読み物であるが、児童たちが記した具体例を見てみると、小学校の教科書の中でも、「社会の教科書」（小学校Ｂ～Ｄ・Ｆ）と記した児童が多い。これは当然といえば当然であろうが、「社会の資料集」（Ｂ・Ｄ）と書いている児童もおり、小学校ＢやＤでは普段の授業において資料集を使うことが多いのではないかと推察される。また、小学校ＢとＤでは、それぞれ1人ずつではあるが、「国語と社会の教科書」（Ｂ）・「社会の教科書、国語の教科書」（Ｄ）と記した児童が見られ、社会だけはなく国語の教科書も児童の「歴史」への興味を喚起する「きっかけ」を与えていることが分かる。

以上、アンケートの集計結果について詳述してきたが、小学４～６年生を対象に実施した調査結果からは、深刻な「歴史離れ」は見られない。むしろ多くの児童たちが歴史に興味を持っていることは調査結果から明らかである。

表４－②　「読み物関係」に関する集計表（学年別）

小学校（所在地）	学　年	児童数	読み物関係（③～⑥）選択者数	③ マンガ	④ 小説	⑤ 偉人の伝記	⑥ ②～⑤以外の本や雑誌
A（石巻市）	4	11	1	1			
B（大和町）	4	126	23	11	8	3	1
C（仙台市）	4	114	59	28	8	17	6
D（仙台市）	4	94	22	11	6	4	1
E（仙台市）	4	39	9	7		2	
F（山元町）	4	16	6	3		2	1
4年生合計		400	120	61	22	28	9
			100.0%	50.8%	18.3%	23.3%	7.5%
A（石巻市）	5	16	4	1		2	1
B（大和町）	5	131	44	16	18	7	3
C（仙台市）	5	112	34	18	5	8	3
D（仙台市）	5	85	15	9	3	3	
E（仙台市）	5	31	7	6	1		
F（山元町）	5	16	11	4		5	2
5年生合計		391	115	54	27	25	9
			100.0%	47.0%	23.5%	21.7%	7.8%
A（石巻市）	6	18	5	3		2	
B（大和町）	6	103	29	19	2	4	4
C（仙台市）	6	105	47	25	3	15	4
D（仙台市）	6	94	21	10	1	8	2
E（仙台市）	6	33	9	6	1	2	
F（山元町）	6	19	9	4	2	2	1
6年生合計		372	120	67	9	33	11
			100.0%	55.8%	7.5%	27.5%	9.2%

10　そう考えた時、南塚氏の指摘は重要である。氏は、「このような漫画の歴史シリーズを読む場合に、そこに書かれている歴史をそのまま信頼してもいいのだろうか」と投げかけ、学習漫画を読む際の注意点を挙げている（南塚 , 2019, PP. 13-16）。

⑵　大学１年生の様子

筆者は、前節で紹介したようなアンケート調査が、児童・生徒の発達段階と「歴史」への興味・関心の変化を考察する上で有用なものだと考えている。中学生や高校生についても同様の調査を行えば、「歴史」への興味・関心の傾向が判明し、若者たちが「歴史離れ」しているのかどうかを確認することができよう。

現時点で、こうした中学校以降の様子について明らかにする用意はなく、今回、小学生を対象に得た調査結果と比較して、中高生たちの意識が、どのように変化するのか、あるいは、しないのかについて述べることはできない。ただし、若干、参考になるようなデータは提供できる。

すなわち、筆者自身が本学で担当している授業「日本史概論」の初回冒頭において、毎年、「歴史の授業・勉強」及び「歴史」に関するアンケート調査を実施しており、2009 ～ 2018年度までの10年間のデータを集計済みであるので、本稿の内容に関係する範囲で紹介してみたい。なお、アンケート用紙の該当部分は図２に示した通りである。

まず、「日本史概論」という科目についてであるが、同科目は、本学教育学部中等教育教員養成課程社会科教育専攻の学生にとっての「必修科目」に、同じく初等教育教員養成課程社会コースの学生にとっての「選択必修科目」に指定されており、いわゆる「社会科」（以下、同様に表記）の学生たちが多く履修する科目で、

2

（５）　「歴史」に関して、あなたが好んでよく読むもの、見るものについて、当てはまる項目すべてに印（☒）を付け、括弧内に記入して下さい。

①歴史学の専門書□　②歴史小説□　③歴史物のマンガ□　④歴史に関する Web サイト□
⑤歴史物の映画やテレビドラマ□　⑥歴史に関するテレビのバラエティー番組□
⑦その他□（　　）　⑧読まないし、見ない□

（６）　「歴史」は好きですか？嫌いですか？当てはまる項目に印（☒）を付けて下さい。

①好き□　②どちらかと言えば好き□
③どちらかと言えば嫌い□　④嫌い□
⑤どちらでもない□

（７）　（６）で①あるいは②と答えた方は、何をきっかけに好きになりましたか？以下の項目から３つを選び、強く影響を受けた順番に１～３までの数字を括弧内に記して下さい。

①小学の授業（　）　②中学の授業（　）　③高校の世界史の授業（　）　④高校の日本史の授業（　）
⑤歴史学の専門書（　）　⑥歴史小説（　）　⑦歴史物のマンガ（　）
⑧歴史に関する Web サイト（　）　⑨歴史物の映画やテレビドラマ（　）
⑩歴史に関するテレビのバラエティー番組（　）　⑪その他（　）

（８）　（６）で③あるいは④と答えた方は、何をきっかけに嫌いになりましたか？以下の項目から３つを選び、強く影響を受けた順番に１～３までの数字を括弧内に記して下さい。

①小学の授業（　）　②中学の授業（　）　③高校の世界史の授業（　）　④高校の日本史の授業（　）
⑤歴史学の専門書（　）　⑥歴史小説（　）　⑦歴史物のマンガ（　）
⑧歴史に関する Web サイト（　）　⑨歴史物の映画やテレビドラマ（　）
⑩歴史に関するテレビのバラエティー番組（　）　⑪その他（　）

図２　「歴史」に関するアンケート用紙

１年生から履修できるものである。ただし、例年、「社会科」以外の所属学生も履修しており[11]、調査対象者520人（表５－①参照）のうち311人は「社会科」所属の学生、209人はそれ以外の所属学生たちである[12]。前述したように、このアンケート調査は、第１回目の講義冒頭で行っているものであり、筆者がまだ授業を行う前の状態であるので、「日本史概論」の影響は全くない状態での調査ということになる。したがって、受講生たち自身が小中高の学生生活や日常生活の中で抱いた「歴史の授業・勉強」や「歴史」に対する感じ方・考え方を読み取ることができるものである。

まず、「『歴史』は好きかどうか」について、表５－②を御覧いただきたい。有効回答者517人のうち、「①好き」と回答した者が325人（「社会科」216人、それ以外109人）、「②どちらかと言えば好き」と回答した者が141人（「社会科」69人、それ以外72人）で、①・②合計466人となっている。これは全体の90.1％に当たり、「日本史概論」という科目を履修した学生だけあって、その割合が高くなっている。

なお、もともと社会科に関する科目に興味・関心が高いであろう「社会科」の入学生だけではなく、それ以外の学生たちも①・②を選ぶ割合が高いことが分かる。「社会科」以外の学生にとって「日本史概論」は卒業要件に含まれる必修科目ではなく、それをわざわざ選択するのであるから、興味・関心が高い学生が集まったとしても不思議ではない。

また、「③どちらかと言えば嫌い」と答えた学生は、「社会科」に10人、それ以外に13人おり、「④嫌い」と答えた学生は、「社会科」に４人、それ以外に１人存在している。すなわち、③ないし④と答えた学生の合計数は、「社会科」・それ以外ともに14人ずつの合計28人存在しており、はっきり嫌いだと答えた学生の数は、却って「社会科」の学生の方が多いことも分かる。

では、彼ら・彼女らは何をきっかけに「歴史」を好

表５－①　アンケート対象者数

調査対象者	人　数
2009年度「日本史概論」履修１年生	47
2010年度「日本史概論」履修１年生	50
2011年度「日本史概論」履修１年生	54
2012年度「日本史概論」履修１年生	63
2013年度「日本史概論」履修１年生	62
2014年度「日本史概論」履修１年生	58
2015年度「日本史概論」履修１年生	50
2016年度「日本史概論」履修１年生	48
2017年度「日本史概論」履修１年生	41
2018年度「日本史概論」履修１年生	47
合　　計	520

表５－②　「歴史」は好きかどうか

「歴史」は好きかどうか	選択者数（社会科）割合	選択者数（その他）割合	選択者合計割合
①好き	216	109	325
	41.8%	21.1%	62.9%
②どちらかと言えば好き	69	72	141
	13.3%	13.9%	27.3%
③どちらかと言えば嫌い	10	13	23
	1.9%	2.5%	4.4%
⑤どちらでもない	11	12	23
	2.1%	2.3%	4.4%
④嫌い	4	1	5
	0.8%	0.2%	1.0%
合　　計	310	207	517
	60.0%	40.0%	100.0%

＊図２の質問（6）をもとに集計。有効回答者数は517人（調査対象者520人のうち、質問（6）に未記入の者３人を除外）。「社会科」は社会科教育専攻および社会コースの所属学生、「その他」はそれ以外の所属学生。

11　2009～2018年度には、「社会科」以外に、初等教育教員養成課程の幼児教育コース、子ども文化コース、教育学コース、教育心理学コース、国語コース、情報・ものづくりコース、体育・健康コースの所属学生、中等教育教員養成課程の国語教育専攻、数学教育専攻、技術教育専攻、音楽教育専攻、美術教育専攻、保健体育専攻の所属学生、特別支援教育教員養成課程の視覚障害教育コース、聴覚・言語障害教育コース、発達障害教育コース、健康・運動障害教育コースの所属学生たちが履修している。

12　なお、実際には２年生以上の学生や留学生も本科目を履修しており、10年間のアンケート回答者数は520人より多くなっているが、高校生の段階までの様子を探るため、敢えて２年生以上のデータについては集計せず、入学早々の大学１年生に限って集計することとし、また、日本における歴史学習の経験がない留学生についても除外している。

きになり、あるいは、嫌いになったのであろうか。質問 (7)・(8) の集計結果より探ってみよう。

質問 (7) は「歴史」が好きかどうかを聞いた質問 (6) において「①好き」や「②どちらかと言えば好き」を選んだ者たちに向けて設けた質問であり、何をきっかけに好きになったのか11の選択肢の中から３つを選び、強く影響を受けた順番に１ ～ ３までの数字を括弧内に記してもらうものである。質問 (6) で①・②と回答した者たち合計466人のうち、質問 (7) における選択肢横の括弧内に１ ～ ３の番号を記載していない者21人を除く445人を対象に、括弧内に「１」と記した項目＝最も影響を受けたものを集計したのが表５－③である。

これを見ると、第１位は「④高校の日本史の授業」、第２位は「②中学の授業」、第３位は「③高校の世界史の授業」、そして、第４位は「①小学の授業」及び「⑦歴史物のマンガ」となっており、「歴史」を好きになった最も大きな「きっかけ」の上位を小中高における「授業」が占めていることが分かる。

アンケートの回答者たちが少し前まで高校生であったことを考慮すれば、記憶に新しい高校の授業を選ぶ者が多いのは頷けるが、第２位に「③高校の世界史の授業」を押しのけ「②中学の授業」がランクインしたのは驚きであり、中学校時代の経験が如何に重要であるかを物語っている。さらに言えば、「①小学の授業」も第４位に入っており、小学校で受けた授業を大学１年生になった時点でも記憶している者たちがいることも分かる。

前節において述べた調査結果と比較するため、「①小学の授業」・「②中学の授業」・「③高校の世界史の授業」・「④高校の日本史の授業」の４つの選択肢を「授業関係」、「⑤歴史学の専門書」・「⑥歴史小説」・「⑦歴史物のマンガ」の３つの選択肢を「読み物関係」としてまとめてみると、「授業関係」の選択者は合計309人（①の選択者45人、②88人、③82人、④94人）で全体の69.4％、対する「読み物関係」の選択者は合計60人（⑤の選択者１人、⑥14人、⑦45人）で全体の13.5％となり、「授業関係」を選んだ者の割合の方が「読み物関係」を選んだ者の割合を大きく上回っており、小学４ ～ ６年生を対象とする調査結果とは真逆の傾向を示していることが分かる。

すなわち、表５－③でも「⑦歴史物のマンガ」が上位にランクインしており、小学４ ～ ６年生を対象とするアンケート結果に相通ずるものがあるが、大学1年生を対象とするこの意識調査においては、小学生とは異なって、「授業関係」の影響の方が「マンガ」を中心とする「読み物関係」の影響を大幅に上回っているのである。

表５－③　「歴史」を好きになった「きっかけ」のうち最も影響を受けたもの

「歴史」を好きになった「きっかけ」のうち最も影響を受けたもの	選択者数	割　合
④高校の日本史の授業	94	21.1%
②中学の授業	88	19.8%
③高校の世界史の授業	82	18.4%
①小学の授業	45	10.1%
⑦歴史物のマンガ	45	10.1%
⑨歴史物の映画やテレビドラマ	35	7.9%
⑪その他	25	5.6%
⑩歴史に関するテレビのバラエティー番組	15	3.4%
⑥歴史小説	14	3.1%
⑤歴史学の専門書	1	0.2%
⑧歴史に関する Web サイト	1	0.2%
合　　計	445	100.0%

＊図２の質問 (7) をもとに集計。有効回答者数は445人（質問 (6) で「①好き」と答えた学生325人、「②どちらかと言えば好き」と答えた学生141人の合計466人のうち、質問 (7) における選択肢横の括弧内に１ ～ ３の番号を記載していない者21人を除外）。

ここで、表５－④より学生たちが「『歴史』に関して好んでよく読むもの、見るもの」を確認してみると、第１位が「⑤歴史物の映画やテレビドラマ」で合計290人の者が選択しており、第２位が「⑥歴史に関するテレビのバラエティー番組」で合計284人、第３位が「③歴史物のマンガ」で合計190人、第４位が「②歴史小説」で合計116人となっており、特に、「歴史」に関する映画やテレビ番組を好む者たちが多いことが分かる。ただし、そうした映画やテレビ番組は、彼ら・彼女らの「歴史」に対する好き・嫌いを左右するような強い影響力を持っているとは言えず、「授業」の影響の方が著しいことは表５－③・⑤を併せて見れば明らかである。

では、最後に、質問 (8) の結果をまとめた表５－⑤より、「歴史」を嫌いになった最も大きな「きっかけ」について確認してみる。なお、同表の集計方法は質問 (7) と同じで、回答者が質問 (8) における選択肢横の括弧内に「１」と記した項目を集計している。

これを見ると、有効回答者28人のうち、その半分に当たる14人が「③高校の世界史の授業」を選んでおり、次が「④高校の日本史の授業」で６人、その次が「②中学の授業」で５人となっている。実に28人中25人までが中学･高校の「授業」によって「歴史」を嫌いになってしまったことが分かる。一方、「授業関係」の中では「①小学の授業」だけ選択した学生がおらず、小学校の「授業」によって「歴史」を嫌いになった学生がいないことも分かる。

以上、十代の若者たちの「歴史」に対する認識に影響を与える「きっかけ」について、その姿を朧気ながらではあるがつかむことができたのではないだろうか。前節での調査結果を踏まえて解釈するならば、本格的な歴史学習が始まる小学６年生において強く出始めた「授業関係」の影響は、中学・高校においてますます強まっていき、時に歴史好きの児童・生徒を、時に歴史嫌いの児童･生徒を生み出してしまう。逆に、「授業関係」よりも小学４ ～ ６年生たちに影響を与えていた「読み物関係」は徐々に影響力を失っていく傾向にあるものの、「読み物関係」の中でも「マンガ」については、「歴史」への興味を喚起する「きっかけ」として、その後も無視できないレベルで影響力を保っていくことになると言えよう。もっとも、「マンガ」が影響力を保ち続けると言っても、「授業関係」と比べれば影響力は著しく下回っていくことになるのであり、過大評価はできない。また、映画やテレビといった映像の世界でも「歴史」をテーマに掲げる作品は多く生み出されているものの、それらが十代の児童・生徒たちに与える影響は「授業関係」と比べれば大きくはないのである。

私立学校を選ぶ場合は別として、義務教育を終えた者たちが大学へ入学するまでには、高校受験や大学受験を経なければならず、「歴史」に興味があろうがなかろうが、否が応でも歴史学習に向き合わざるを得ない。こうした経験が前述したような「授業関係」の影響力を増す一因になっているものと推察できるが、筆者が調査を行った相手は、国立の教育大学に入学して

表５－④　「歴史」に関して好んでよく読むもの、見るもの

「歴史」に関して好んでよく読むもの、見るもの	選択者数	割　合
⑤歴史物の映画やテレビドラマ	290	55.9%
⑥歴史に関するテレビのバラエティー番組	284	54.7%
③歴史物のマンガ	190	36.6%
②歴史小説	116	22.4%
④歴史に関する Web サイト	71	13.7%
⑧読まないし、見ない	65	12.5%
①歴史学の専門書	58	11.2%
⑦その他	30	5.8%
合計	1104	

＊図２の質問 (5) をもとに集計。有効回答者数は519人（調査対象者520人のうち､質問 (5) に未記入の者１人を除外)。複数回答可なので「選択者数」は延べ人数。「割合」は519人のうち何人が選択したかの割合。

表５－⑤　「歴史」を嫌いになった「きっかけ」のうち最も影響を受けたもの

「歴史」を嫌いになった「きっかけ」のうち最も影響を受けたもの	選択者数	割　合
③高校の世界史の授業	14	50.0%
④高校の日本史の授業	6	21.4%
②中学の授業	5	17.9%
⑪その他	2	7.1%
⑤歴史学の専門書	1	3.6%
①小学の授業	0	0.0%
⑥歴史小説	0	0.0%
⑦歴史物のマンガ	0	0.0%
⑧歴史に関する Web サイト	0	0.0%
⑨歴史物の映画やテレビドラマ	0	0.0%
⑩歴史に関するテレビのバラエティー番組	0	0.0%
合計	28	0.0%

＊図２の質問 (8) をもとに集計。有効回答者数は28人（質問 (6) で「③どちらかと言えば嫌い」と答えた学生23人、「④嫌い」と答えた学生５人の合計28人)。

きた学生、しかも、日本史に関する科目を履修した者たちという極めて限られた者たちであり、今回の調査結果がそのまま日本社会の若者たち全般に当てはまるものなのかどうかという疑問も当然のことながらわいてこよう。本研究課題は始まったばかりであり、今後は、そうした疑問にも答えられるよう準備していく必要があろう。

3．小学生による読書体験の現状

第２章の考察で示されたように、現在の小学生において、歴史への関心の主要な契機は学校の歴史授業よりもむしろほかの機会、とりわけ漫画や図書などの「読み物」であった。小学校における当該分野の授業が主として６年次になって登場する一方、アンケート対象はそれより下の学年を含んでいることもあり、ある意味当然の結果ではあるものの、小学校６年生でも授業以外を回答する生徒が多い点は示唆的である。そこで本章では、現在の小学生の読書傾向について確認をしていきたい。まずは、彼らが文献を入手する主要な経路の１つと推測される公共図書館の利用状況を確認した後、購入されている児童書のランキングの分析を通じて、小学生の読書活動の実態に迫ることとする。

⑴　仙台市内の公共図書館の状況

筆者（田中）は2019年５月22日付けの電子メールにより、仙台市図書館に対して、本研究課題の趣旨を説明しつつ、最近の児童・生徒による市内図書館の利用状況の調査に関し協力を依頼した。これに快諾を頂戴し、６月22日付けで2018年度のデータをいただいた。まずは心よりお礼申し上げたい。

表６－①は、仙台市内の市立図書館全館（市民・太白・宮城野・泉・若林・榴岡・広瀬・移動・分館）における小学校６年生までの児童・生徒による部門別の貸出統計、６－②はせんだいメディアテーク内にある仙台市民図書館の状況である。ちなみに「冊数」の欄にある数値後方の括弧内のパーセンテージは、その世代の貸出総数に占める各部門別の割合を示し、「全体の割合」欄のパーセンテージは全世代の貸出総数に占める当該世代の貸出数の割合を示す。

さらに、この表６－②のデータに付された仙台市図書館からのコメントによると、せんだいメディアテーク２階に独立した形で設置されている「児童書コーナーで貸し出している図書は、絵本、児童文学が多い。児童文学（日本）については、７～12歳の貸出が46.2%を占めており、全体としても貸出冊数が多い分野である。特に、「やさしいおはなし」に分類されている低学年向きの小説がよく借りられている。絵本は未就学児が借りていくことが多く、～６歳までの貸出が全体の４割を占めており、これに対して小学生は7.3%程度である。児童２門（地理・歴史）については、全体の４割を占めており、開架では、特に伝記漫画がよく借りられている。また、小学校の授業（５年生）で伝記を取り扱う際の伝記の貸出は、開架だけでなく、学校連携事業の授業用図書貸出やボランティア団体のブックトークによる関連本の貸出等も入ってくる。貸出の時期も、授業で興味を持ったという児童が多く、授業を行った時期に貸出が集中する」とのことである。

これらのデータ・コメントからは、第２章で指摘された諸点、すなわちa. 地理・歴史関係の図書の影響力は小学６年生までの児童・生徒で強い、b. 漫画の人気が高い、との共通性が浮かび上がる。その一方で、これは貸出のデータのため、児童・生徒が図書館内で閲覧しているケースを加味すれば、若干違った結果が生じる可能性も一概には否定できないものの、それでも日本文学など他の部門に比べ、地理・歴史関連の文献の人気が突出して高くなることは考えにくい（ちなみに筆者も2019年６月に仙台市民図書館２階の児童書コーナーを訪れ、利用状況を観察したが、地理・歴史の文献を閲覧している利用者はほとんどいなかったように見受けられ、いずれかと言えば、これらの文献は借り出して読む傾向が強いように思われた）。

実際、仙台市図書館のサイト（https://lib-www.smt.city.sendai.jp/）で紹介されている、2018年11月１日から2019年８月31日までの期間における、１か月ごとの児童書貸出ベスト30リスト（2019年９月５日に確認）を見ても、日本文学のカテゴリーに属する『かいけつゾロリ』シリーズ、絵本に属する『バムとケロ』『100かいだてのいえ』シリーズなどが目立ち、歴史関連の文献は全く登場しない。なお同時期の予約書ベスト30（2019年９月５日に確認）では、以下の４冊が見受けられる。

- チーム・ガリレオ『戦国合戦へタイムワープ（歴史漫画タイムワープシリーズ）』（朝日新聞出版

2018年１月刊行：2018年11月期25位、12月期20位）。

- 本郷和人監修『東大教授がおしえるやばい日本史―歴史ってすごいばかりじゃたのしくない―』（ダイヤモンド社　2018年７月刊行：2018年12月期３位、2019年１月期24位、2019年２月期12位、2019年３月期20位、2019年４月期28位）。
- 真山智幸『ざんねんな偉人伝―それでも愛すべき人々―（新しい伝記シリーズ）』（学研プラス　2017年７月刊行：2018年12月期20位）。
- 本村凌二監修『東大名誉教授がおしえるやばい世界史』（ダイヤモンド社　2019年７月刊行：2019年８月期20位）。

これらのデータから判断する限りでは、一部の文献への注目は高いにせよ、やはり全体的に多数とは言えないように思われる。

表６－①　仙台市図書館全館における児童・生徒の2018年度貸出統計

	冊数（６～９歳）	全体の割合	冊数（９～12歳）	全体の割合
児童０門　（総記）	1,269　(0.56%)	18.90%	848　(0.70%)	12.60%
児童１門　（哲学）	3,288　(1.45%)	25.00%	1,955　(1.62%)	15.20%
児童２門　（地理・歴史）	11,924　(5.27%)	23.40%	10,253　(8.51%)	20.10%
児童３門　（社会科学）	4,379　(1.93%)	19.70%	2,822　(2.34%)	12.70%
児童４門　（自然科学）	22,292　(9.85%)	27.20%	9,033　(7.50%)	11.00%
児童５門　（技術）	8,522　(3.77%)	29.50%	4,513　(3.75%)	15.60%
児童６門　（産業）	2,379　(1.05%)	13.30%	1,024　(0.85%)	5.70%
児童７門　（芸術）	20,919　(9.24%)	23.10%	9,369　(7.77%)	10.30%
児童８門　（言語）	2,466　(1.09%)	23.00%	1,180　(0.98%)	11.00%
児童９門日　（日本文学）	86,535 (38.23%)	27.70%	56,912 (47.24%)	18.20%
児童９門外　（外国文学）	12,905　(5.70%)	20.20%	11,620　(9.64%)	18.20%
絵本	49,466 (21.85%)	7.20%	10,957　(9.09%)	1.60%
総冊数	226,344　(100%)		120,486　(100%)	

表６－②　仙台市民図書館における児童・生徒の2018年度貸出統計

	冊数（６～12歳）	全体の割合
児童０門　（総記）	169　(0.39%)	23.30%
児童１門　（哲学）	566　(1.14%)	36.10%
児童２門　（地理・歴史）	2,965　(5.95%)	41.80%
児童３門　（社会科学）	1,029　(2.07%)	32.10%
児童４門　（自然科学）	3,755　(7.54%)	36.30%
児童５門　（技術）	2,033　(4.08%)	47.90%
児童６門　（産業）	501　(1.01%)	17.00%
児童７門　（芸術）	3,096　(6.22%)	34.00%
児童８門　（言語）	165　(0.33%)	27.90%
児童９門日　（日本文学）	24,316 (48.83%)	46.20%
児童９門外　（外国文学）	4,725　(9.55%)	37.50%
絵本	6,476 (13.01%)	7.30%
総冊数	49,796　(100%)	

⑵　児童書購入図書の状況

その一方で、購入されている児童書のランキングにおいては興味深い状況が見られる。大日本印刷株式会社が運営し、丸善・ジュンク堂・文教堂などの大型書店と連携しつつ、紙媒体・電子媒体双方の書籍の通信販売も行うサイト honto（https://honto.jp/）においては、2019年９月５日時点で2016年以降の年間児童書・絵本の販売ランキングが紹介されている。50位以内に入った歴史関連の文献を挙げたのが表７である。なお文献情報の前に付した数字は、当該年度における順位である。

仙台市図書館の貸出書ランキングでは必ずしも上位に登場しなかった歴史漫画のセットが、児童書全体の中でも毎年上位を占めている点が目を引く。この相違が仙台市周辺と全国の動向との違いによる可能性もあるが、第２章の調査結果からすると、前者においても歴史漫画への関心が見られたことから、恐らくは接触経路の違い、すなわち歴史漫画においては市立図書館以外の場所で触れる事例が相対的に多いことに起因するものと推測される。

こうした学習用の歴史漫画については、南塚（2019）によると、「日本の歴史」の場合、1960年代から刊行が始まり、その後、1980年代と2010年代に山を迎えつつ、継続して出版されている。今回ランクインしたシリーズには、まさにこの2010年代の新版が多く、歴史漫画への継続的な関心の高さが窺える。その一方で「世界の歴史」については、1980年代に３シリーズが刊行されるなど盛り上がりを見せた後は低迷しているとの

表７　honto サイトの児童書・絵本ランキングにおける歴史関連文献

年　代	文　献
2019年度 （上半期）	２．小学館版『世界の歴史』全巻セット ４．集英社版『日本の歴史』全巻セット ５．小学館版『日本の歴史』全巻セット 10. 本郷和人監修『東大教授がおしえるやばい日本史』 36. 平林純（2018）『信長もビックリ!? 科学でツッコむ日本の歴史―だから教科書にのらなかった―』（集英社） 40. 吉野朋美監修（2015）『まんがで読む万葉集・古今和歌集・新古今和歌集』（学研プラス）
2018年度	１．KADOKAWA 版『日本の歴史』全巻セット ４．小学館版『日本の歴史』全巻セット ５．集英社版『日本の歴史』全巻セット ７．集英社版『世界の歴史』全巻セット 16. 青山剛昌原作（2018）『日本史探偵コナン』全巻セット（小学館） 30. 学研プラス版『世界の歴史』全巻セット（別巻なし） 43. 学研プラス版『世界の歴史』全巻セット
2017年度	１．小学館版『日本の歴史』全巻セット ２．集英社版『日本の歴史』全巻セット ３．KADOKAWA 版『日本の歴史』全巻セット ４．チャーニン , N.（2016）、斉藤洋訳『耳の聞こえないメジャーリーガー ウィリアム・ホイ』（光村教育図書） 11. 学研プラス版『世界の歴史』全巻セット 12. チーム・ガリレオ（2017）『歴史漫画サバイバルシリーズ』全巻セット（朝日新聞出版） 16. 集英社版『世界の歴史』全巻セット（旧版） 23. 学研プラス版『日本の歴史』全巻セット 24. 瀧本哲史（2016）『ミライの授業』（講談社） 25. 鳴海風（2016）『円周率の謎を追う―江戸の天才数学者・関孝和の挑戦―』（くもん出版）
2016年度	２．KADOKAWA 版『日本の歴史』全巻セット ３．小学館版『日本の歴史』全巻セット（旧版） 12. 小学館編（2015）『キッズペディア世界遺産』（小学館） 14. 齋藤孝監修（2016）『こども孫子の兵法―強くしなやかなこころを育てる！―』（日本図書センター） 16. 集英社版『日本の歴史』全巻セット 23. 学研プラス版『日本の歴史』全巻セット 27. 瀧本哲史『ミライの授業』 39. 集英社版『世界の歴史』全巻セット（旧版）

指摘がある点からすると、基本的には世界史の内容が本格化する以前の小中学生が、これら歴史漫画シリーズの主要な読者と想定されていると考えられる。こうした歴史漫画が近年の出版不況の状況下でも好調な売れ行きを示している点については、『朝日新聞』2016年９月16日朝刊の紙面においても紹介がなされており、その要因としては、2013年に刊行された坪田信貴『学年ビリのギャルが１年で偏差値を40上げて慶應大学に現役合格した話』（KADOKAWA）の中で、歴史漫画が「偏差値30の子に効果的な日本史の学習法」として紹介され、広く注目を集めた点、また団塊世代の祖父母が自分たちの孫のため「旺盛な購買」意欲を発揮している点などが挙げられている。

この第二の要因は、上でも指摘した貸出書と売り上げとの差異の現象とも適合する。これら通史型の歴史漫画のセットは、全巻だと１万円を越え、時に２万円前後に達する点に鑑みると、児童・生徒当人よりは保護者や親族、学校図書館などが購入している可能性は十分に考えられよう。ただし、もしそうであれば、家庭や学校など、周囲に歴史に触れる環境が一定程度存在することは確かながら、児童・生徒個々人が実際に手に取るかどうかまでは一概に断言できない。すなわち、たとえ漫画であっても、より娯楽性の高い作品や、さらにはゲーム、テレビ、ネット環境などが並列している状況で、通史型の漫画を児童・生徒が積極的に選択する可能性は、それほど高くないようにも思われるからである。歴史漫画ではないが、hontoランキング上位に登場する『耳の聞こえないメジャーリーガーウィリアム・ホイ』や『円周率の謎を追う―江戸の天才数学者・関孝和の挑戦―』も、2017年の第63回青少年読書感想文全国コンクールの読書感想文・課題図書に選定された文献であり（前者は小学校中学年、後者は中学生対象）、児童・生徒による自発的な購入というよりは、環境の影響力を認めざるを得ない。2019年度上半期にランクインした『まんがで読む万葉集・古今和歌集・新古今和歌集』も、平成から令和への改元によるところが大きいだろう。とはいえ、こうした環境と実態との乖離の有無を探るには、さらに児童・生徒個々人の具体的な読書活動を今後調査していく必要性があるものと思われる。その一方で、いわゆる「大人」の側では、日本及び世界の歴史について身近の児童・生徒に知っていてもらいたいとの意識を強く持っているとは捉え得るかもしれない。

なお歴史漫画シリーズにしても、既述の『朝日新聞』の記事によれば、人気漫画家による表紙イラストの執筆、ソフトカバー化、カラーページの増加など、体裁面での諸種の変化が試みられている。それに加え、歴史的事実を通史的にビジュアル化するに留まらず、現代を生きる児童・生徒が過去にタイムスリップして、それぞれの時代を体験するタイプのシリーズ―hontoランキングにも登場する『日本史探偵コナン』や『歴史漫画サバイバルシリーズ（2018年以降『歴史漫画タイムワープシリーズ』と改称）』―も人気のようである。例えば『日本史探偵コナン』では、「21世紀の日本から13人の少年少女達が過去のさまざまな時代へと飛ばされ」てしまい、彼らが現代に戻るための手段として「時のイシ」を集めるのを、人気漫画シリーズ『名探偵コナン』の主人公江戸川コナンと少年探偵団らが、スマホ型端末を介して助言と手助けをするという設定になっている。

こうした試みが、自身と行動や心情を重ねやすい登場人物を配置することで、児童・生徒の関心を引くことを意図し、実際に一定の成功を収めていることは確かであろう。本稿で提唱する、児童・生徒に最初の関心を抱いてもらうという点では、非常に効果的な手法だと言える。ただし実際に中身を読んでみると、懸念される部分も感じられる。南塚（2019）は歴史漫画の問題性として、第一にストーリーが明快な分、「出来事や出来事と出来事の因果関係などが非常にシンプルに描き出されて」おり、「間違ったことは書かれていないにしても、面白くないことは取り上げられない傾向がある」点、第二に「人物や生活や景色を明快に描いて読者に見せてくれる」反面、それらの「イメージを、作者があらかじめ与えてしまうことになる」点を挙げている。これらは歴史漫画の持つ視覚的効果や分かりやすさという強みと表裏一体であり、悩ましい問題であるが、タイムスリップ型の歴史漫画はこうした問題性をさらに強く帯びているものと言える。とりわけ第一の点については、まず21世紀の児童・生徒と過去の人物とが接触し、時には親しく語り合うという虚構性ゆえに、彼らと同世代や近い世代の架空の人物が設定されやすく、さらに実在の人物にしても性格描写が偏りやすい状況が生じる。またこうした主人公たちの視点を通じて出来事が描写されるということは、彼

らが直接に接触する人物や事件のみが取り上げられることを意味し、情報が限定される分、時代的特徴の俯瞰的な叙述・説明も困難になる[13]。その意味では、南塚（2019）が指摘する歴史小説の性格、すなわち歴史的事実に基づいてはいるが、「出来事の背景や状況の説明、あるいは出来事と出来事の間の関係の説明においては、作者の創造･創作に負うところが非常に大き」く、「登場人物のある行動に至る過程や心理状況は作家によって『語られる』ことになる」特性と類似する部分が大きいと言えるかもしれない。

ところで、こうした歴史漫画シリーズが児童・生徒にとって歴史に触れる最初の機会となったり、小中学校の歴史教科書を言わば補完する役割を担ったりするのに対し、むしろ一定の歴史的知識を前提としつつ、それを新説や別の視角から捉え直すことの面白さを提示する点に主眼があるように思われるのが、『東大教授がおしえるやばい日本史』である[14]。児童・生徒自身が実際に購入しているかは定かでないものの、『朝日新聞』2018年10月31日朝刊の宮城県版によると、本書はこの月の丸善仙台アエル店の売り上げ10位に入ったとのことであり、仙台市周辺でも一定の注目を得ていると言える。

この本は、卑弥呼を皮切りに、小学校の教科書でも取り上げられる日本史上の有名人38名を素材に、まずはその「すごい」側面として各人の歴史的意義を解説した上で、「やばい」個人的エピソードを紹介する形式をとっている。前半については、それこそ通史型の歴史漫画や伝記、教科書に見られるのと同様の内容となっているが、これらの通説を知っていればこそ、後半の面白さが際立つ。その意味では、一定の歴史的知識を持つ「大人」の方が、本書を味読できるかもしれず、読者も必ずしも児童･生徒に留まらない可能性もある。また本書はいわゆる「偉人」と言えども、「ひとりの生きた人間である」事実を知ることで、「歴史がぐっと身近なものになる」と主張する点では、やはり歴史への関心の喚起を重視する試みと捉えられる。さらに、その根底には、現在「偉人」とされている人物の評価は、ある特定の価値観に基づいているものであり、歴史とは、観点の変化により見える像が異なるものである点を示唆する態度が潜んでいるようにも思われる。

小学校の学習指導要領の歴史的分野では、もともと指導的人物を手がかりとした教育が想定されているため、伝記的な内容は小学校歴史教育の柱の１つでもある。この『やばい日本史』以外にも、近年、真山（2017, 2018）、大石（2017, 2019）、大野（2018）など、いわゆる偉人の失敗談、負の側面を対象とした文献が多数刊行されている[15]。若干懸念されるのは、通説を知らない児童･生徒がまずはこれらの文献を手に取った場合、従来型の偉人伝とは逆の方向ながら、同様に一面的な人物像が内面に形成される可能性がある点である。また、こうした人物中心の歴史学習は、個々の個人的エピソードの集積として歴史を理解させてしまう危険性も帯びるように思われる。『やばい日本史』では、時代別に章を分け、冒頭にそれぞれの時期の社会構造の特徴を示すなど、工夫も見られるが、それでも基本的には各人のエピソード集としての色彩が強い。例えば、現代的な価値観からは「やばい」と捉えられる行動様式や意識が、当時においては必ずしもそうではなく、むしろ一般的なものであった場合もある点など、人間社会の編成・運営原理の時期的相違を知覚させる叙述が含まれていれば、単にエピソードを「暗記」させるだけでなく、過去に関して「思考」させる契機となり得るかもしれない。とはいえ、これは恐らくは編集意図を越えた「ない物ねだり」であり、むしろこれらの文献を出発点として歴史に関心を抱いた児童・生徒に対し、いかにして理解をさらに深めるか──一面的な歴史認識ではなく、多面的な歴史評価の可能性を感じてもらうか、また個人に留まらず、その時代的背景を意識してもらうか、など──その点を改めて考察する必要があるだろう。

13　小説ではあるが、世界史を題材としたM. ポープ＝オズボーンの『マジックツリー・ハウス』シリーズも、現代を生きる小学生きょうだいがそれぞれの時代にスリップするという点で、類似した構造を有する。ただし、こちらは章末に時代背景などの若干の解説は付されているものの、学習用の資料ではなく、あくまで純粋な娯楽作品である。

14　同様の構造を持つ文献として、自然科学の知見に基づいて日本史上の事象の意義を再考する『信長もビックリ !? 科学でツッコむ日本の歴史』も挙げられる。

15　このようにネガティヴな表題の図書の増加には、児童・生徒に親近感を持ってもらう意図があるものと考えられるが、恐らくは2016年に最初の巻が刊行された『ざんねんないきもの事典』の成功によるところも大きいだろう。

4．社会科と国語科の接合の可能性

⑴　社会科と国語科をつなぐもの

第２章でも述べたように、小学生児童の歴史への興味・関心を引き出すきっかけとしては、漫画の影響が大きいことが小学生を対象とした調査結果から窺える。その中で若干名ではあるが、社会科及び国語科の授業や教科書を挙げる回答があった。それはつまり、社会科だけでなく国語科の授業・教科書によって、小学生の歴史への興味を引き出すことができる可能性を秘めているということである。本章では、歴史への興味・関心を呼び起こすために、他教科（ここでは特に国語科）が果たし得る役割やその可能性について検討を行っていく。

論を進めるに当たり、まず確認しておくべきは、社会科と国語科がどのような点で関連を持ち、どのような点で国語科教育が歴史への興味・関心を引き出すための機会となり得るのかといったことである。国語科教科書に掲載されている説明文や物語文の内容はさまざまであるが、そこには歴史的な時代背景を持つものが多くある。また、実際に文章を読み進めていくと、現代日本にはない道具や文化などが取り上げられることもしばしばある。つまり、国語科教科書には歴史への広がりが期待できるということである。もちろん、国語科の目標は歴史学習ではないので必ずそれに言及したり、歴史的な話に広げたりする必要があるわけではない。ただ、文章の読解において、何について書かれているのか、何を述べようとしているのかを理解しようとする際に、言及されている時代の様子や道具、文化の詳細（現代との差異）などを知っておくことは重要である。言い換えれば、国語科教材を読む上で、歴史への興味・関心へとつながっていく機会があるということである。現状において、国語科の教育現場でどれほど歴史的な話への広がりを見せているかは定かではないが、少なくとも社会科のみならず国語科の授業や教科書によって歴史への興味・関心を持った児童がいることは事実である。このように、国語科は歴史への興味・関心を引き出す機会としては十分に可能性を秘めていることが予想される。

以下、本章では現状の把握のために、国語科教科書に掲載される歴史関連のテキストを取り上げ、その傾向について見ていく。その後、いくつか具体的な教材を取り上げつつ、具体的にどのように歴史と関わりを持たせることができるのかについて考察していくことにする。

⑵　国語科教科書における歴史関連テキスト

それでは、国語科の教科書において一体どのくらいのテキストが歴史と関連しているのだろうか。ここでは、宮城県の小学校でシェア率が高い東京書籍と光村図書の2015（平成27）年度発行の教科書をもとに筆者（津田）が行った調査結果から[16]、国語科教科書における歴史関連テキストの傾向について見ていくことにする。なお、先述の通り国語科教材を読み解くためには、歴史（をはじめ社会科、さらにはほかの教科）に関する知識を持つことが重要である。ここでいう歴史に関する知識とは、時代区分名やそのとき何が起こったのかという歴史的事実を知ることだけではなく、現代との違いなど、その時代の状況や生活、文化を理解するということである。そのため、歴史教材テキストが直接歴史に関わる場合（時代設定や言及の時代が明確な教材など）だけではなく、テキスト理解の上で歴史的な知識が必要となる場合（現代日本には見られない道具や文化について触れる教材など）についても同様に取り上げるものとする。次に挙げるのが、各教科書に掲載されている歴史関連テキストである（*斜体*は付録教材）。

○東京書籍[17]

第１学年：*「花さかじいさん」*

16　株式会社宮城県教科書供給所のサイト内の「平成31年度小学校教科地区別採択一覧（小学校）」（http://www.miyakyo.co.jp/select/）によると、国語科において宮城県下の大多数が東京書籍を採用し、数校が光村図書を採用している。学校図書、三省堂は各１校のみである（最終閲覧日：2019年９月12日）。

17　『新編 あたらしいこくご 一上・一下』、『新編 新しい国語 二上・二下』、『新編 新しい国語 三上・三下』、『新編 新しい国語 四上・四下』、『新編 新しい国語 五』、『新編 新しい国語 六』。いずれも、2014（平成26）年検収、2015（平成27）年発行。上記教科書では、「本は友達」、「○年生の本だな」として多くの図書作品が紹介されたり、「日本語のしらべ 春～冬」などとして俳句や短歌、また漢詩などが紹介されたりしている。そこには、歴史に関わるものも多く見られる。

第２学年：「だいだらぼうのお話」「いなばの白うさぎ」「かさこじぞう」*「ないた赤おに」*
第３学年：「白ねずみ」「はとが聞くから」「モチモチの木」*「吉四六さん」「一休さん」「彦一さん」*
第４学年：*「一つの花」*「ごんぎつね」「くらしの中の和と洋」「世界一美しいぼくの村」「『百人一首』を声に出して読んでみよう」「土竜うるし」*「世界一美しい村へ帰る」*
第５学年：「竹取物語」「平家物語」「おくのほそ道」「和の文化を受けつぐ」「手塚治虫」「大造じいさんとガン」「枕草子」*「宮沢賢治」*
第６学年：「イースター島にはなぜ森林がないのか」*「ヒロシマのうた」*

○光村図書[18]
第１学年：「おむすびころりん」「まのいいりょうし」「たぬきの糸車」
第２学年：「いなばの白うさぎ」「三まいのおふだ」「スーホの白い馬」*「十二支のはじまり」*
第３学年：「たのきゅう」「ちいちゃんのかげおくり」「三年とうげ」「モチモチの木」
第４学年：「ふるやのもり」「一つの花」「ごんぎつね」
第５学年：「あめ玉」「竹取物語」「平家物語」「徒然草」「おくのほそ道」「千年の釘にいどむ」「大造じいさんとガン」「百年後のふるさとを守る」「わらぐつの中の神様」「浦島の太郎」*「犬と肉（ししむら）の事」「見るなのざしき」*
第６学年：「河鹿の屏風」「平和のとりでを築く」「イーハトーブの夢」「『鳥獣戯画』を読む」「伝えられてきたもの、狂言 柿山伏、『柿山伏』について」「かなえられた願い―日本人になること」

一見、歴史に関わらないように見える教材についても、作品の時代背景が垣間見えたり、現代にはない道具や文化が示されたりしている。例えば、「わらぐつの中の神様」（光村図書、第５学年）は現代に近い時代の話であるが、そこには「わらぐつ」や「げた屋」といったものが見られる。いずれも近年では見ることがなくなったものである。これらのものが指す具体物や用途は辞書を調べれば分かるものであり、絵や画像もすぐに手に入れることができる。しかし、これらが実際にどのように使用され、なぜ現代において使用されなくなったのか。そこにはどのような生活や文化の変化があったのか。そういったことを理解するためには、歴史的な背景や知識が必要になる。また、「くらしの中の和と洋」（東京書籍、第４学年）のように、日本古来の伝統的な文化と、新たに流入した西洋文化の違いが示されているものもある。その文章中には歴史に関わる直接的な表現が見られなくとも、なぜ西洋文化が流入し、これほど定着しているのかについて歴史的な背景から考えることが可能である。和服から洋服へ、和室・ざぶとんから洋室・いすへと生活様式の変化を歴史とともに追うことで、より文章の理解が深まるのである。

さて、上記一覧を見ると、時代背景を感じさせる昔話や古典作品など（「いなばの白うさぎ」、「竹取物語」など）が多く掲載されていることが分かる。また、日本、海外問わず歴史的事実にもとづいたり（「ヒロシマのうた」など）、明確な時代が分からないまでも服装、様子、文化背景に現代との差異が認められたり（「ごんぎつね」など）といった物語文が見られる。さらに、説明文においても、現代と過去の事実を比較したもの（「和の文化を受けつぐ」など）があり、そこから歴史的な文化背景が認められるものがある。付録教材については、各教科書会社が示す指導計画に必ずしも記載はないが、発展的な内容としてや関連文章として掲載されているものである。いずれの教科書でも、各学年１教材以上は歴史に関わる内容が含まれていることが分かる。そして、第５学年においてそのピークが訪れるようである。これは古典作品の掲載が大きな理由であるが、それを除いても物語文、説明文ともに歴史に関わる内容が含まれている。さらに、別の傾向として、中学年以上で戦争に関わる教材の掲載が複数見られる

18 『こくご 一上 かざぐるま』、『こくご 一下 ともだち』、『こくご 二上 たんぽぽ』、『こくご 二下 赤とんぼ』、『国語 三上 わかば』、『国語 三下 あおぞら』、『国語 四上かがやき』、『国語 四下 はばたき』、『国語 五 銀河』、『国語 六 創造』。いずれも、2014（平成26）年検収、2015（平成27）年発行。光村図書も東京書籍と同様に、「この本、読もう」や「季節の言葉」などを設け、さまざまな作品や句などを取り上げている。

ことが挙げられる。これらは国語科の教材としてはもとより、敗戦国、唯一の被爆国として、さまざまな観点からその事実を直視し、厳然たる過去として後世に語り継ぐべき内容の平和学習の教材である。

現状、各教科書会社は歴史に関わる教材を上記一覧のように掲載しているわけだが、それらをもとにその内容に関わる歴史的な事実などに触れることは少ないだろう。それは、教科書会社が発行する教師用指導書を見ても分かる。求められる学びは、国語科で掲げられる「読む、書く、話す・聞く」などの技能育成を中心としたものであり、教材の内容をはじめ用語、設定の歴史的な背景に言及する必要性は述べられない。これはある種当然のことであり、国語科の授業の中で歴史に触れるかどうかは、教材を扱う教師によるということである。

だが、先述したように、国語科の教科書教材を理解するに当たり、歴史的な背景や情報を得た方がより深い理解へとつながる可能性が多分にある。そうであれば、国語科教材の理解の補助に歴史的な知識や情報を伝える、調べる、学ぶことは重要であり、国語科には十分に歴史に興味・関心を引き出す素地があるように思われる。しかし、現状として教材の歴史的背景に触れられない場面が多いと言わざるを得ない。

⑶　教材から考える社会科と国語科の接合

では、国語科の中で、どのように歴史への興味・関心を引き出すことができるのだろうか。また、国語科教材をもとにして、どのように歴史への興味・関心へとつなげていくべきなのだろうか。

ここでは、まず橋本武氏の『銀の匙』を使用した国語の授業実践について簡単に見ていき、1つの作品を、時間をかけて読んで理解するということについて考えてみたい。その上で、実際の国語科教材をもとに歴史への興味・関心を引き出すため、どのように教材を扱っていけばいいのかについて考えていきたい。

a)『銀の匙』の国語授業

橋本（2012）は、灘校での実践を紹介したものである。中学校3年間で『銀の匙』1冊を読み切るという橋本氏の授業は、ほかに類を見ない授業法である。しかし、その方法には学ぶべきところが多くある。中勘助『銀の匙』（岩波文庫）は著者の自伝録であり、幼少期（明治時代）の遊びや生活、ことばなどが描かれている。橋本氏の授業は、中勘助の当時の遊びや生活、感情を追体験することで進められる。もちろん、3年間かけて1つの作品を読み切ることは現実的ではない。だが、齋藤（2018）にあるように『銀の匙』を著者の体験に寄り添いイメージを共有したり、自身の体験に投影したりすることが重要であり、またその作業は電子機器の発達した現在であればそれほど時間をかけなくても可能である。ここで重要になるのは、1つの作品について表面的な内容理解だけではなく、より深く国語科教材を「読む」ということである。この『銀の匙』についても、時代背景とともに、多くの現代との差異が読み取れる作品である。それを歴史的な知見から見ていくことで、読みを深めることが可能となる。それは、中学校や高校の国語科に限らず、小学校でも同様であろう。

ただし、灘校は私立校であるがゆえに橋本氏のような授業ができるという面もある。特に公立校では、教科書からの逸脱が難しい面がある。少なくとも、教科書の内容はもらすことなく扱う必要がある。先述のように、国語科教材にも歴史的な背景を持つものが少なからずあるのは事実である。そうであれば、現行の教科書教材をもとに、『銀の匙』と同様の深い「読み」が可能であろう。

b) 戦争関連教材「一つの花」

ここでは、東京書籍、光村図書ともに所載の「一つの花」[19]をもとに、どのように歴史への関わりを見出すことができるのか簡単に検討していきたい。「一つの花」の掲載のねらいは、「人物の気持ちや場面の様子を想像しながら読む力を確かなものにするとともに、豊かな感性や、思いやりの心も育みたい」というものである（『新編 新しい国語 四上　教師用指導書研究編』東京書籍　2015年、以下『研究編』とする）。また、同時に戦争の悲しみや平和の尊さについて考えさせるといった平和教材としての側面を持つ。掲載のねらいを見ると、登場人物の心情把握を重視しており、また教材の時代背景から平和への啓蒙が求められてい

19 「一つの花」の本文については、『新編 新しい国語 四上』（東京書籍　2015年）所載のテキストを利用した。

ることが分かる。また、学習指導計画として、題目にもある「一つ（だけ）」をキーワードに読み解いていくことが示されている。時代背景を踏まえることも示されているが、授業内で戦時中の実態をどのように伝えるかは具体的には示されていない。筆者の経験では、小学校６年生の時に修学旅行で広島での平和学習を行い、そこで戦争の悲惨さや当時の状況をしっかりと学んだ。それまでにも、国語科教材やテレビ、漫画などで戦争の様子を知ることはあったが、原爆ドームなどを自身の目で実際に見るということは大きな経験であった。ところが、戦争を題材とした教材は小学校中学年以降扱われており、その際、戦争というものをどれほどしっかりと理解して教材に向き合っていたのかは定かではない。どちらかというと、教材を読み進める際に、戦争を否定的にとらえる考えが単に先行していたように記憶している。だが、それでは国語科の授業というよりも道徳的な内容に寄りすぎている。あくまで歴史的な背景の上に戦争をとらえ、教材を読んでいくことが必要なのではなかろうか。

それでは、「一つの花」をどのように読んでいくことができるだろうか。戦時中の状況を把握するきっかけを見つけることは、教材本文から可能である。

- 毎日、敵の飛行機が飛んできて、爆弾を落としていきました。
  町は、次々に焼かれて、はいになっていきました。（P. 118, ll. 7-8）

戦時下の悲惨で予断を許さない状況が見て取れる。現代の児童・生徒にとっては、かけ離れた世界のことであるが、それが日常にあった時代を知ることができる箇所であろう。また、食という面での当時の苦しさも知ることができる。

- そのころは、おまんじゅうだの、キャラメルだの、チョコレートだの、そんなものは、どこへ行ってもありませんでした。おやつどころではありませんでした。食べるものといえば、お米の代わりに配給される、おいもや、豆や、かぼちゃしかありませんでした。（P. 118, ll. 4-6）

そして、これらの部分は内容理解の上で、教材の終盤に出てくる文章と併せて確認する必要がある。以下は、「十年の年月がすぎ」た場面である。

- でも、今、ゆみ子のとんとんぶきの小さな家は、コスモスの花でいっぱいに包まれています。（P. 124, ll. 4-5）

この表現は、父親がゆみ子にくれた「一輪のコスモスの花」と対比的に描かれているが、同時に、戦時下においては街が灰と化していたが、「十年の年月がすぎ」たことで、戦争を乗り越え、コスモスの花で溢れる、明るく新しい時代へと変化している様が窺える。また、食の様子についても変化が窺える。

- 「母さん、お肉とお魚と、どっちがいいの。」
  とゆみ子の高い声が、コスモスの中から聞こえてきました。（P. 124, ll. 8-9）

戦時中から10年が経ち、生活が変化している事実は本文から読み取れる。ただ、それで当時の状況を把握したとは言い切れない。戦時中の様子や生活状況については資料が豊富にあるので比較的理解しやすいが、10年後の生活はどうであろう。教材では、戦時中の様子との対比のために明るく描かれているが、実際にどうであったのか知る必要がないだろうか。10年後の生活は決して現代と同じではないはずである。GHQ が撤退し、朝鮮戦争に伴う景気の上昇により復興は進んでいたが、生活の様子自体は現代とは異なるものであったはずである。教材の最後では、いっぱいのコスモスに囲まれ、１つだけではなく食べ物を選べる状況にあったことが読み取れるが、実際の生活自体は見えてこない。本文の表現は、戦争という荒波を乗り越えた先にある風景だからこそ明るく映るのであって、現代のようにものが溢れる生活を示すものではない。著者の今西祐行は、『研究編』において次のように述べる。

> 今から五十年前、戦争に敗れた日本の街まちはほとんど焼け野原であった。人びとの多くは、防空壕に、拾い集めた焼けトタンの屋根をのせたような家に住んでいた。
>
> ときたまそんなみすぼらしい家のまわりがいっぱいのコスモスやオシロイバナにつつまれている

ことがあった。軍隊から帰ったばかりの私の目には、どんなにつくり上げられた庭園よりも、それは美しいものに見えた。(P. 241)

常に恵まれた生活の中にいる人には気が付かないものが、そこにはあるのである。「一つの花」を単なる平和教材としてではなく、歴史的な背景も踏まえた国語科教材として読み込むことで、その先に自ずと平和や豊かさといったものの価値が見出せるのではないか。

また「一つの花」には、ほかにも最前線に駆り出される兵を見送る様子など、戦争の否定的なイメージと反する状況についての描写がある。国や民のどちらかからという偏った視点からだけではなく、多角的な視野から見ていく必要があるということである。そのためには、歴史的な背景を知るほかない。遠い世界の出来事としてではなく、実際に起こった事実として理解する必要もある。「配給」や「防空頭巾」、「軍歌」、「とんとんぶき」など現代で聞きなれない単語については、辞書などで調べれば意味は把握できる。しかし、それらがその時代にどのような役割を果たし、どのような位置づけであったのかについても学ぶべきなのである。それにより、教材の深い理解が進むはずである。

本章のまとめに代えて、古田 (2019) を紹介したい。古田(2019)では、授業を比喩的に表す「料理」に注目し、国語授業における「料理」を①料理するのは誰なのか、②料理とは何か、③全員がおいしいと思う料理はあるのか、という 3 つの観点から検討している。古田(2019)の考えは、次のようにまとめられる。授業は学習者の国語能力育成に重点を置くべきであり、授業者の腕前披露に終始してはならない (①)。また、教材の中のことばはさまざまな経緯や背景を持っているので、その場で使用されている理由や、組み合わせ、誰に対してのものかを把握する必要がある (②)。そして、授業者と教材が前提としている思想や価値観を学習者が常に消化できるわけではないし、そのかい離は自分や相手の考えや価値観を理解するための機会となる (③)。この主張は、本章の主張とも重なると考える。社会科と国語科の目標が学習上異なることは承知の上だが、国語科としては、②にあるように教材やことば、表現の歴史的な側面を理解することで、①の児童・生徒の国語能力育成の一助となるはずである。もし教材の主張や価値観に児童・生徒が共感できない場合、それは時代的・文化的背景に起因する可能性がある。そうであれば、③のようにこれは新たな考えや価値観に気付く良い機会となるのである。以上について、社会科の視点から見れば、国語科教材を通して歴史的事実に触れるということであり、歴史への興味・関心を引き出すきっかけとなり得るということである。また、さらに述べれば、小学校という 1 人の教員が複数の教科を担当するという環境にあって、国語科教材で得られた歴史への興味・関心が社会科の授業へと接続していけば、両教科にとってもより深い学びとなるはずである。

5．結びに代えて

本稿における分析から、近年の高等学校及び大学で懸念される「歴史離れ」については、少なくとも小学生の段階ではそれほど明示的ではなく、むしろ歴史に対する興味・関心を抱く児童・生徒が一定数存在することが明らかとなった。さらに彼らが歴史に関心を抱く契機は、小学校の授業よりもそれ以外の機会、とりわけ保護者や学校図書館により準備される歴史漫画などに求められることも分かった。関心の強度、個々人による読書の具体的状況に関するさらなる精査が必要であるとともに、中学生以降に関する調査がいまだ十分でないとはいえ、本稿が推測するように、もしそうした関心が学年の進行に伴い低下していくのだとすれば、どのような対策が考えられるだろうか。

第一に、本稿の知見に基づくならば、中学生や高校生が歴史に触れる主要な機会が学校の授業となっている点に鑑み、その授業自体を改善することが挙げられよう。この点については、既述のように、大学入試や教科そのものの改変を通じ、学校現場の変化を期待する方向で、すでに改革が提言されているのは良く知られる通りである。それとともに、中学生・高校生が社会科の授業以外に歴史と接する機会が乏しい構造そのものを変えることもまた、重要な手段となり得るかもしれない。とはいえそれには、小学生の時点では活発だった読書習慣の回復など、生活スタイルの根幹的な変化が必要な点を考えると、教育の分野のみに留まらず、包括的な社会的課題に属することも確かである。

その一方で第二に、中学生・高校生の段階で言わ

ば「スポイル」されないほど強固な形で、児童・生徒における歴史への興味・関心を小学生時点で涵養する方途も考えられる。その際、第４章で紹介したように、国語科教育など他教科の授業との相互補完的な連携（これは本稿でも示唆したように国語科のテキスト理解の深化にも通じる）を含め、歴史への関心を開く機会の量的拡大を図るとともに、一面的な認識・理解に留まらない､歴史漫画の問題性を超克し得るような、まさに「歴史に出会った」ことを自認できる質的向上の双方を志向することが求められよう。そのための実効的手段については、中学生・高校生における歴史との接点の実態解明と併せ、今後の課題となる。

※本稿は、2019年度宮城教育大学学長裁量経費（重点支援研究）の成果の一部である。また本稿執筆のために貴重な情報を御提供下さった６つの小学校の教員・生徒の皆様、そして仙台市図書館の担当者の方々には、この場を借りて改めて心よりお礼申しあげたい。

文献

カー , E. H.（1962）、清水幾多郎訳『歴史とは何か』（岩波文庫）。
大学の歴史教育を考える会編（2016）『わかる・身につく 歴史学の学び方―歴史学がわかると世界が見える―』（大月書店）。
古田尚行（2019）「『国語の授業』とは何か」（紅野謙介編『どうする？どうなる？これからの「国語」教育　大学入学共通テストと新学習指導要領をめぐる12の提言』幻戯書房）184-200ページ。
橋本武（2012）『〈銀の匙〉の国語の授業』（岩波ジュニア新書）。
日髙智彦（2019）「『歴史的に考える』ことの学び方･教え方」（南塚信吾・小谷汪之編著『歴史的に考えるとはどういうことか』ミネルヴァ書房）149-184ページ。
松方冬子（2017）「学習マンガと歴史学」（歴史学研究会編『歴史を社会に活かす』東京大学出版会）105-113ページ。
真山知幸（2017）『ざんねんな偉人伝』（学研プラス）。
真山知幸（2018）『ざんねんな歴史人物―それでも名を残す人々―』（学研プラス）。
南塚信吾（2019）「歴史と出会うとき」（南塚信吾・小谷汪之編著『歴史的に考えるとはどういうことか』ミネルヴァ書房）３-30ページ。
桃木至朗（2009）『わかる歴史・面白い歴史・役に立つ歴史―歴史学と歴史教育の再生をめざして―』（大阪大学出版会）。
小田中直樹（2007）『世界史の教室から』（山川出版社）。
大石学監修（2017）『しくじり歴史人物事典』（学研プラス）。
大石学監修（2019）『どんまい歴史人物事典』（学研プラス）。
大野正人（2018）『失敗図鑑―すごい人ほどダメだった！―』（文響社）。
大阪大学歴史教育研究会・公益財団法人史学会編（2015）『教育が開く新しい歴史学』（山川出版社）。
齋藤孝（2018）『別冊 NHK100分 de 名著 読書の学校　齋藤孝 特別授業『銀の匙』』（NHK 出版）。

（令和元年９月27日受理）